010.4
E78

世界に於ける日本圖書館事業の意義及び使命

衞藤利夫著

始

278
91

世界に於ける日本圖書館事業の意義及び使命

附、分類の論理的原則、圖書分類に於ける題件と形式、圖書記號組合せの話

南滿洲鐵道株式會社
奉天圖書館長
衞藤利夫

010.4
E78
278-91

はしがき

奉天圖書館が過去六年の歳月に迚つて來た、『圖書館事業の科學化より哲學化へ』の、ホンの第一歩の足跡を記念すべく、或は、その一歩からスタートして、今後向うべき方角の視野を展げる爲に、この小冊子を編む。わが鈍い、重い、覺束なき足どりを常に勵まし、慰め、鞭ち、倒れてはまた起つの勇氣を與えて下すつた、同勤の僚友、櫻井、安樂、松原、井上其他の諸兄の、眞純な厚誼が今更の如く回顧せらるゝ。途は遠い、マダ〳〵、氣が遠くなりさうに遙かな前途だ。躓くのもいゝ、苦しむのもいゝ、然しいかなる場合にでも勇氣と根氣とを失ひたくないと思ふ。

大正十四年六月　奉天にて

滿洲圖書館長會議の開かれんとする時

筆者

發行所寄贈本
大正14.6.14
寄贈

奉天圖書館の業務標語（モツトー）

祈れ　よし宗教的信仰はなくとも何か知ら天を仰ぎ地に俯し、至上のものにわれとわが心を投げつける敬虔な心持、そこから人間の至誠が生れる。

歌へ　歌へるやうな朗明透徹の氣分、彈力のある靈魂、そこに吾人の生活の歡喜がある。

働け　働くことがわが生命の創造であり、飛躍である、生きん爲に働くのぢやない、働かん爲生きてるのだ。

目次

世界に於ける日本圖書館事業の意義及び使命……一
分類の論理的原則……二〇
圖書分類に於ける題件と形式……三五
圖書記號組合せの話……五二

世界に於ける日本圖書館事業の意義及び使命

——（第十九回全國圖書館大會にて）——

閣下並びに諸君、世界に於ける日本圖書館事業の意義及びその使命といふことに就きまして卑見を述べさして頂きます。日本が、國家としての世界に於ける政治的地位は、一としきり三大國とか、或は五大國の一だとか申しまして大變に結構なことになつて居るやうに承つて居ります。ツマリそれだけの地位を占めて居ると云ふことが、世界の政局に於て、それ相應の重大なる意義と使命とを持つて居ると云ふことになります。政治的にはそれでいゝ——よくないかも知れませんが——まづ大變な長足の躍進をしたといふことに致しまして、吾々日本の圖書館の事業を世界的に考へました時、卽ち日本の吾々の事業を、世界の圖書館事業を背景とする舞臺に上せました時、果してドンナ位置を占めることになりませうか。これを考察する爲には、わが日本が持つて居る一切の印刷文化、科學、哲學、文學、宗教、政治や歴史の世界的勢力と、圖書館施設運用の大體を見なければならぬので御座いますが、一々統計的の計數などに當らぬでも、その邊御同業の間に於きましては大體の見當はつくことと存じます。私の寡聞を以てしますれば、或るキユリオシチーからして珍物扱ひとしてよりほか、日本の圖書館のことが、世界的の眞面目な問題となつたことを知りません。かれこれ廿年前、英國に「ブック・ウヨーム」（蠹魚）と題します、圖書學專門の、可なり玄人向きの澁い雜誌が出て居りまして、（非常にいゝ月刊雜誌でしたが餘り永續しないで、今日は疾うにモウ廢刊して居ります。）それに、成るだけ廣く、異つた、世界の邊陬の圖

書館事業の紹介などを致して居ますうち、わが日本の圖書館のことがホンの數行、例の通りの珍物扱ひとして書いてありましたことを記憶致し居ります。何でも「若き日本のライブラリアン、タナケの報告」によつて云々として、當時の帝國圖書館の藏書の統計のやうなものでありました。若きタナケ氏が、わが日本圖書館界の長老にして元勳であり、數日前痛ましい訃報を當會で傳へられました、田中稻城先生であること申すまでも御座いません。そしてこの數行の記事を讀みました、雜誌の讀者としての感じは、「ホホウ！、日本と云ふ東海の孤島にも圖書館なんて云ふものがあるのか。」と云ふ位ゐのものに過ぎません。その後今日までの歳月と、吾々の營々たる辛苦がドレダケ世界的に吾々の事業を推進致したか、これは頗る問題であります。早い咄しが、震災を蒙つた大學圖書館に對する世界的の同情など云ふ消極的な意味により外、わが日本の圖書館事業が、少しも世界的の話題にならぬこと、二十年前の「若き日本のライブラリアン、タナケ」の時代と少しも變らぬと申しても過言ではありますまい。假りにわたくし共の仕事に最も緣故の深い、圖書分類記號の順序から申しますと、デウエーでは、タシカ國土としての日本は、歐羅巴の四に對して、亞細亞の五、その亞細亞の二、則ち五二と申す、餘り上位でもない記號が配當されて居るやうに記憶してゐます。尤も、文學、哲學、宗教に於て餘り優れた地位を要求する權利のない米國に最高位の一を配當して居るデウエーの配列を悉く承認するワケではありませんが、極めて平然と、インデファレントな態度で、宇宙知識の秩序連絡に於て、日本の地位を見た一例として擧げて見るのであります。地理的に見た日本は五二、更に國語と致しましての日本語は、同じくデウエーでは、二が英語、三が佛蘭西語、四が獨逸語と段々續きまして、九が群小諸國語、群小諸國と十

把一とからげに片づけるなど隨分人を馬鹿にしたものでございます。更に驚くべきことには、その群小諸國語の一が印度歐羅巴諸小國語、こゝにサンスクリットや露西亞語等が群居し、二がセミチック、三がハミチック、四がシーシアン、ウラル・アルタイ語、その五がヤット支那語日本語を一束に片づけて終つて居るやうな始末です。こんな多人數の聽衆に對しまして、教室の講義めいた煩瑣なる記號配當のお咄しなど申しまして非常に恐縮を致しますが、ツマリ私がこゝに云はんと欲することは、日本語の世界的地位はこれをデウエーが見た、所謂宇宙知識の秩序連絡に於きまして、群小諸國語の、しかもその五番目に、支那語と同じ割長屋に居ると云ふ意味に於て、九五と申す難有い地位を配當されて居ると云ふ事實でございます。モッと判り易く例をわが皇室に於ける群臣の宮中席次にでも取りますなら、英獨佛語などが大勳位、親任官のところなら、日本語の所謂九五などは判任官の下つ端と申すところでせう。一方が吾黨內閣でも出來たら大臣の椅子位ゐには有りつける政黨の領袖連なら、こちらは陣笠か、院外團の走狗か、いづれにしろ大變な末派たることを免れません。政治的に見たる世界の一等國も、かう見て來ると、イヤハヤその地位や憫れむべきと申さねばなりません。殘念だと思つても、これは致し方がない。日清、日露、世界戰爭を優等パスした日本が、世界の一等國になつたのは、政治的にそれだけの功績を樹立して居ります。しかし、地理としての日本が、世界の表に極めて狹少の地域を占めて居る爲に幅が利かぬのは當然であり、又世界に誇示すべき思想、文學、科學、哲學乃至宗教を——持たないことはないが、世界が左樣認めて呉れない——その日本語が今申す通りの、陣笠扱ひ、末派扱ひをうけて居るのは、これ又、今日では致し方がない。

しかし、現在の地位が末派であるといふことは、たゞ單にそれだけでは必ずしも一概に悲觀するに當らぬ。人間に於きましても、老朽無能にしてドン底生活をしてるものなら、これはまア絶望だ。その活動の分野（フィールド）領域が限定せられて、手も足も出ぬ末派だつたならこいつも困る。イカサマ悲觀するなと云つたつて悲觀せざるを得ぬ。でありますが、これに反して、眼の前に無限の、未だ鋤を入れぬ分野を控えて居る、そして大なる希望と、勇氣と、若さとを以て武者振ひし乍ら、今からこれを開拓しようと云ふツマリ上り阪の、その第一歩にあるが故の末派なり、陣笠なりであるなら、その末派である、下位にあると云ふことを大に感謝しなきやならぬ理由がある。世界の舞臺に於て、日本の圖書館事業が、極めて下位にあることはよろしい。しかし今云ふ通り、その下位に二種ある、日本は果してその孰れの下位に屬するかをこゝに考へて見たいのであります。即ち大した意義も使命も將來に孕まぬ低い地位にあるものであるか、或は大きな使命を持つて居る、若い生活力の潑溂たる末派であるか、問題はそこにあります。

この問題を、私はこゝで二つの側面から觀察致します。一つは圖書館と云ふ一種のインスティチュートの「物的」の側面と、今一つはその「人的」の側面であります。物的といひ、人的と云ふ區別は、後段自然詳述せられざるを得ないのでありますが、こゝで大體の見當をつくれば、圖書館の機械主義（Mechanism）と、その目的主義（Teleologism）であります。モット端的に申しますれば、その肉體と精神であり、その科學と哲學——哲學などいふ科學臭ひ言葉を使ふよりむしろ宗教的に知慧——さうだ、圖書館の「知慧」の側面と申したいのであります。

で、先つその器械主義——即ちメカニズムの一面を見まするに、十九世紀の後半の、その中頃から——圖書館事業の急速な擡頭は、アメリカでは一八七八年からと云ふことになつてゐます——二十世紀の今日にかけて最近五十年に於て、圖書館事業は、世界の如何なる時代の文明史も與り知らぬほどの長足の進歩をしました。それに準じて、所謂圖書館科學なるものが非常に進んだ。曰く圖書學、曰く分類曰く記載法、と云つたやうな、圖書館整理の、機械的側面の本は、日本にこそ寥々たるものであるが、西洋には數え切れぬ程澤山ある。その方面で仕事をした、デウエーや、カッターや、ブラウンや、セーヤーや、リチャードソンなどの功績は、實に氣の小さい私共を驚倒せしめて尙餘りあるものが御座います。しかし御同樣に吾々日本の同業者はそんな本を讀んで、彼等の仕事に敬服すると同時に、一面吾人が日本人として、日本に於ける、少くとも明治大正の時代に於ける圖書館の經營者として感ずることは、彼等歐米人は、吾人に比すれば非常にラクな立場にあると云ふことであります。勿論、彼等の仕事の對象と致しましては、埃及のパピラスもありませう、アッシリアの瓦經もありませう、バーチメントもあれば、中世時代の卷子本や、マヌスクリプトもありませう、が、それは特別扱ひに屬する特種の場合でありまして、大體、常務としての取扱ひの對象は、グーテムベルヒ以來、即ち印刷術發明以後の本だと云つてよろしい。即ち字母は必ずや、大體はローマン・アルファベット、稀にあつても希臘アルファベット、その組合せが横に走つてゐるものに限られて居る。本は左から開けてそこが卷頭、右にめくつて讀んで行つて、右のドンヅマリで卷末に達するものである。

玆に一つ可笑しな咄しがあります。或る西洋の大きな圖書館に、ドウした間違ひか、ヘブリューの本

が來た。ヘブリューの本が東洋の本であると云ふことを御承知下さい。左から起つて右に終る本ならドンナものでも驚かぬそこのカタローガー先生、これには眼玉を白黑しまして、トウ々々「卷末から始まる本」とカタローグしたと申します。ところでドウです？日本の圖書館業者は、所謂和漢書なるものに於て、西洋の逆を行つて、「卷末から始まる本」ばかりを取扱つて居る。左から右に横に走る代りに、上から下へと縦に讀む本ばかりを取扱つて居る。餘談でありますが、因襲的なトラディションを無自覺にそのまゝ蹈襲しなきやウソだとすれば、和漢書のカードを今日多く見るやうに、横書きに書くのは間違つてゐる。更に和書は音韻によるものとしてアイウエオに組み、漢書はその字の本質が象形文字なるが故に、須らく漢字字典流義に字劃で組むべしと云ふことになる。玆で烏渡そんなトラディションが何故何時の間にか、知らず識らずのうちに破られかかつたかと云ふことを念頭に浮べて置いて下さい。然るに極東の、絶海の孤島の、アイヌやイスキモーと同列に群小諸國と片づけられた惨たる日本の圖書館業者は、今のやうに卷末から始まる本、乃至五十音組み、或は字劃組みの本ばかりを心配してゐればいゝかと申すに、ナカ〳〵左樣ではない。和漢書に對して、英佛獨の本、卽ち卷首から始つて、アルファベットが横に走る本が、それこそ文義的（リチラリー）に書庫に横溢する。この全然成立を異にする二樣の本を消化しなきやなるぬと云ふ、歐米の圖書館業者が夢想だにせぬ難地に立たされて居るのであります。それが、バビラスや、タブレット乃至卷子本見たやうに、稀覯書として來るんぢやなくつて、日常の常務として殺到する。吾人のデスクの上には縦組の和漢書が縦溢し、横組みの洋書が横溢する。縦と横との、東西圖書館事業の十字架に架せられてゐるのが、吾人、日本の圖書館業者の運命と見るべきでありませう。成

程、ブラウンも偉い、デウエーも偉い。しかしその偉さのフイールドが實に狹い。例へば玆に倉田百三の「出家とその弟子」と云ふ本がある。これをアクセッションし、著者名記入し、書名記入し、文學、日本、劇、現代と分類し、更にブラッセルの11B式に、親鸞傳に分出し、佛敎の眞宗に分出するなり、レファするなり位ゐのことは、わが奉天圖書館が養成した司書助手の年少者でも鼻唄交りでヤッつける。が、これを世界の圖書館科學の泰斗の前につきつけたら、恐らく彼等は、タブレットやバビラスをつきつけられた以上に狼狽するであらう。彼等は、日常の常務としては自動車の走る横一本の道を行く。吾等は蟹の如く行き、鳥の如く飛ばねばならぬ。チャンポンにそれをやらねばならぬ。彼等と吾等と、比較にならぬ立場の相違と申すのはそこです。彼等が圖書館事業なり、圖書館學なりを大成するのは、云つて見ればその立場が大成するに都合のいゝやうに出來て居る。例へば貴族で大金持の子が、貴族院議院で一二度質問でもすれば、その次に出來た特權内閣の椅子位ゐには有りつけやうといふやうなものだ。これに反して日本の圖書館業者は、プロの子が腕一本で、貧困と逆運との上り阪をこれから越えなきやならぬ、今その山の麓に立つてゐるやうなものです。或は彼等は飛行機に乘つて空を行くものであり、吾等は今申す西洋を象徴する横、東洋を象徴する縦、その重い十字架を背負つて、一歩一歩喘ぎつゝ足で地を踏んで木の根岩角の嶮路を上るものと申してよからうと存じます。

私が玆に題を掲げまして、世界に於ける日本圖書館事業の「意義」と云ひ、その「使命」と申しますのは、取りも直さず吾人の眼前に屹立致しますこの嶮路を指すのであります。吾人の背に負はされた縦と横との十字架を指すので御座います。嶮路とは何でせう？十字架とは何でせう？縦の東洋文明、横の

西洋文明、その二線が十字にクロスしたことは、これ東西の文明、學問、思想の交響を意味するものにあらずして何でせう。色々な情勢は、吾々日本の圖書館事業を驅つて、實にこの壯大なる、東西文明交錯の焦點、恰もそのクロスの中心に立つべく餘儀なくせしめたので御座います。ああ、東西兩洋の學問思想の融合統一！靈肉一致の第三帝國の建設！何と云ふ大きなる文化の集大成でせう！顧れば希臘、羅馬の文明も、ルネッサンスも、乃至印度、支那、或はユーフラテス、チグリスの河畔に生じた人生觀も、歸するところこの偉大なる綜合に到るまでの道程に過ぎなかつたのではありますまいか。而してこの、驚心駭魄の世界的文化の大運動の先陣を承るの光榮を荷ふべく運命づけられたものが、誰あらう？滿堂の閣下、並びに諸君！御互ひだと申すので御座います。

十字架を背負ふことは、それ自身が榮光だと申すのではない。猶太の盜賊でも、基督と相並んで所刑されて居る。十字架を背負ふたものが、基督であることによつて、十字架も意義があり、使命がある。日本の圖書館業者が、東西文明融合の大使命を自覺すると、せざるとは、進んで世界の文化史上の基督となるか、或は退いて猶太の盜人とその運命を等しうせんとするか、その分岐點に立つて居るものと見るべきでありませう。

飜つて明治以後今日に到るまで西洋の圖書を、日本のそれと相交えて受入れた、吾々圖書館業者の先輩諸賢のしたことを見ると洵に怪訝に堪へざるものがあります。今申します、縱と横との二線を、幾何學的に云ふ同一平面の上にクロスさせないで、縱の線を引く平面と、横の線を引く平面とを別個に設けて居るの觀があります。同一圖書館内に於ける和漢書の部と、洋書の部との、根本的の差別取扱ひがそれであります。和漢書は、洋書を顧慮することなく、和漢書だけの平面に開展され、書架を異にし、目錄を異にし、洋書は洋書で、和漢書を顧慮することなく、別な平面に別乾坤を成して居ると云ふ奇觀を呈して居るのであります。かくて和漢書は和漢書の因襲的なトラディションによる記入をうけて五十音で組まれ、和漢書式の分類をうけ、和漢書式のサブゼクトで整理され、洋書は洋書で、洋書式に處理せらるゝと云ふのが、大體の遣りかたであります。それがデウェーが云つたやうな意味に於ける並行圖書館（Parallel library）であるならそれも宜しいが、日本に於ける和洋書の差別取扱ひは、所謂並行の意味を成して居ない。彼と是との間にコレスポンデンスがない。向うの何が、こつちの何に照應し、アレとコレとが相響くと云つたやうな、兩者の間に交通機關を設けて居ないのが普通だ。汽車もあれば、汽船もある、飛行機もある、郵便も電報も乃至は當節大流行のラヂオもある文明開化の當節に、文化のパイオニアを以て自任する吾人の仕事としては、さりとは餘りに世間離れがし過ぎて居る現象ではありませんか。

この事實を少し具體的に申しますれば、先づ第一に題件記入（subject entry）の場合にしますれば、數學に洋の東西はない、二と五と合せて四になると云ふサブゼクトは、これを英語で書いても、佛蘭西語で書いても、乃至日本語、支那語、露西亞語で書いても同じことだ。その本質に於て異るところはない。吾人が圖書取扱ひ者として、關心の對象となるエッセンシアルなものはその數學の知識である、サブゼクトである。そのサブゼクトを表現する形式の相違、卽ち國語の差別の如きはその次ぎに顧慮すべきものであります。區分の論理的テキニックで申しますなれば、この場合區分の基礎（又は特質）と

なるべきものはサブゼクトであつて、それが表現された國語の如きは一のアクシデント（偶然性）たるに過ぎない。然るに日本從來の圖書館業者は、その偶然性（アクシデント）を眞向うに振翳して、本質的な、一あつて二なきサブゼクトを眞二つに打割つて居る。そしてその割られた片側と、片側との間に何等の通信機關を設けて居ない。斯くして西洋の科學と、支那や日本の科學とは全然路傍の人であり、宗教も、醫學も、彼我の間に何等の因緣なく、互ひに風する馬牛も及ばざる狀態を呈して居る。地名にしても、例へば奉天と申す土地に二つはない。日本人はこれを「ホウテン」と呼び、支那人は「フエンテン」、西洋人はMukdenと呼ぶ、その偶然の作用によつて、同じ奉天と云ふサブゼクトの本なり、カードなりが、あちらにあつたり、こちらにあつたりと云ふことになつて居ります。次に著者名記入（アウサアエンドリー）の場合を考へて見ますのに、例へばゲーテに二人はない。所謂 Vernacular form（母國式）によつて、獨逸綴りで Goethe, Johann Wolfgang von と書かれ、そして GOE… で組まれるのが當然だ。然るに森鷗外氏のゲーテの邦譯は、それを顧慮することなしに、五十音のゲで組まれて居る。譯者によつてギョーテと書いてあればギで組まれぬとも限らぬ。更に書名記入（タイトルエンツリー）に於ても、「ファウスト」と云ふ唯一の本が、獨逸語、佛蘭西語英語のものと、邦譯とは全然身首その場所を異にして居る。

最後に分類はドウなるかと申しますのに、恐らくこれが一番その分裂に於て徹底して居る。洋書の分類と、和漢書のそれとは全然その體系を別にしてゐる。彼と此とは月の世界と、地球とのやうに隔絶されて居ると云つても過言ではありますまい。惜しい哉、折角の十字架が、孰れの點から見ても、十字架になつてゐない。何處でもクロスしてゐない。縱と横とが、銘々勝手にアチ向きコチ向きと云つた

風に横たへられてゐる。こんなことを申しましたら、藏書幾十萬を數ふる大圖書館の經營者は、君は多分この幾十萬の圖書の縱と横とをクロスさせるために、ドレダケ途方もない勞力と、手數とをかけなきやならぬか、想像も及ばぬだらうと云はれるでせう。私も大きな圖書館にゐて、全然その邊の消息を解せぬことはない。が、圖書館の大小、骨が折れる、折れぬなンテ云ふことは本質的な問題にはならぬ。手つとり早い咄しが、或る一人の學徒が自分の書齋を持つて居るとする。そこには自分の研究のサブセクトに關する和書もあれば洋書もあるのが、今日の日本の學徒の普通の狀態です。ところでその學徒が一のサブゼクトについて、和書を讀む時は、その頭腦の中で、西洋の書で讀んだ同一サブゼクトに對する知識の聯想を一時的に杜絶して居りますか？これを逆に申せば、彼が獨逸語でショウペンハワーを讀む時、佛書、經文、梵文で讀んだ印度の思想を暫時封じ込めて置きますか？それどころか寧ろ反對に出來得る限り頭腦の中でその聯想を活かしてこそ、西東の兩洋の本を讀むと云ふ事に意義がありはしませんか。彼が多少のライブラリアンであるならば、必ずやカードなり、メモなり、或は書き入れなり乃至圖書の配列の工夫なりを以て、この二つの世界の交通連絡を圖るでせう。手を下して左樣せぬまでも頭腦のうちで双方に電氣を交流させて居れば同じことである。この一個人學徒のその私有書齋に於ける態度は、直ちにこれを移して圖書館經營者がその圖書を處理するの態度となるべきものであります。藏書が眼を廻す程多いとか、トラモ手數が大變だなど云つて、逡巡してゐる秋では御座いますまい。

勿論私は圖書館の實務者としまして、その統一事業の並一通りでない、骨の折れることであることは認めます。決して手前味噌を揚げるワケではありませんが、私は過去三年間、二萬卷に亘つて、組み方

を決定する範圍内に於ての羅馬字エントリーを用ゐましてこの放膽なる企てを遂行致しました。そして今日ドウヤラこの分ならヤッて行けさうだと云ふ自信を得ましたから、始めてこの意見を公表するのでございます。嚮きにも非常に骨の折れる嶮路だと申しましたのは卽ちそれでございます。羅馬字を用うるがいゝか悪いかは別と致しまして、この日本の圖書館の機械的の側面を大成する爲に吾人に殘された問題は、歸するところ和漢洋書を一貫する記載法（著者名、書名、題件）の大成、及び同じく和漢洋を通ずる索引を伴ふ分類體系の大成といふことになります。目下然るべき體系がありませんので、私共の圖書館ではデウェーの原體系をそのまゝ日本語に引直して用ゐて居ります。

日本の圖書館事業の物的側面、そのメカニズムの世界的意義、並びに吾人に脊負はされた世界的使命を、極めて輪廓的に論ずれば以上のやうなことになりますが、しかし要するにそのメカニズムの大成は、更に或る大なる目的に向ふ道程、乃至方便に過ぎないのであります。吾人の仕事には、モット深いもの、更に大なるものがある。西洋の長所とするメカニズムの上に、東洋の長所とするテレヲロギズムを打ち立てねばならぬ。何の爲にメカニズムに苦勞するかと云へば、それを方便として、圖書館なる人格的インステイチユートの「知慧」を輝かさうとするに外ならぬので御座います。

從來、物的に說いて、縱と横とを單に本の組み方、字の走りかたのやうに、形而下の意味にのみ見て參りましたが、この縱と横との關係はそんな薄ッぺらなものではありません。更に深い、形而上的の大きな意味を含んで居るのであります。東洋西洋の縱横と云ふ關係は、字の組み方から、少し精神的な方面に這入ると、隨所にこれを發見することが出來ます。例へば、本の分類の如き、ホンの一歩思想的

内容を要するものに就いて見ましても、西洋が、知識の横の擴がりを逐ふて、哲學、科學、社會、文學言語云々と平面的に臚列するのに反して、東洋では、支那の聖、賢、諸子百家とか、或は經、史、子、集と云つたやうに、その價値判斷によつて、上下に、立體的に積み上げて居るのを御覽なさい。一方が飽まで科學的、物的であるなら、一方は飽まで目的的、人格的であります。一方が飽まで平面的で、デモクラチツクなら、一方は徹底的に立體的で、貴族的で、そこにも掩ふところなき縱と横との對照を見ることが出來ませう。東洋の圖書館事業の精神的側面、その知慧を論ずるに當りまして、この縱横關係を、モ少し根本的に見ることを許して頂きたい。

縱の態度を以て宇宙現象を視るものは、そこに「神」を發見する。宗教はそこから起るのであります。横の態度を持して宇宙現象を見るものは、そこに「物」を發見する。科學、主として自然科學はそこから發生するのであります。この縱横二つの線の世界の思想に於ける最も大なる現はれは伯希來思想と希臘思想であります。太古ユーフラチス、チグリスの河畔に生を享けた民族は、雷電風雨、晝夜四時の如き自然現象に對しても、現象の奥に秘された一の意志を見ようとした。もろもろの現象を縱貫する唯一のものを求めたのであります。これに反して、地中海の波碧くして大理石の階段を洗ふほとり、現世に於ける現實の喜に醉ひ疲れた民族にとつては、山川草木は見るがまゝの山川草木であつた。彼等は横にその臚列を見ました。同じ自然現象に對しても、伯希來人はその前に畏れてひれ伏し、希臘人は、その美しさを歌つたと見るべきでせう。人生問題にしましても、ソクラテースが、「最善の人とは、最も多く自己を完全にしようと努むる人である。幸福な人とは、自己を完全にしつゝあると、自ら信ずる人であ

る。」と云つて居るのを聽くと、吾人はたゞワケもなくそのうちに、陰影のない希望と快感を感ずる。それだけのことなら誰にでもオイソレと出來さうだ。カーライルが云つたやうに、ソクラテースは、非常に Zion をラクに考へて居る。希臘人にはそんなにラクに考へられた Zion が、伯希來人に取つては、實に難中の至難事である。彼等は最初からそれに對して恐れ戰いで居る。かく伯希來人の眼界から、理想を遠いところに隔絶して仕舞つたものは、その罪の觀念であつた。伯希來思想（ヘブライズム）は、基督教に遭つても、少しもその趨向をモディファイすることを必要としなかつた。舊約の幾千萬語は、要するに、その罪を憎み、これを脱るゝことを敎うるものに外ならぬ。新約は、それと戰つて、死をも辭せざるべきを說くものに外ならぬ。かくして伯希來人が、辛酸刻苦して、その「知慧」を縱に掘り深むるに對して、希臘人は波紋のやうにラク〳〵と、横にその「知識」を擴げた。世界文化の發達は、このヘブライズム、ヘレニズムなる二大思潮の鬪爭、ツマリ宗敎と科學、唯神論と唯物論、靈と肉との杆格より來たものに他ならぬと見得るのであります。これを一口に申せば、中世はヘブライズムの時代であつた。文藝復興（ルネサンス）以來、世界戰爭の終局あたりまでは、先づヘレニズムの時代、卽ち横がブレヴェールした時代であつた。これを東西兩洋の關係に見れば、文藝復興（ルネサンス）以來、科學全盛時代の西洋文化が横の文化であるに對して、猶太、支那、印度、日本等の文化は六千年來、主として縱の傳統を保持して居る。ヘレニズムに對するヘブライズムとは主として西洋人が謂つたことで、東洋人のうちでも、印度のタゴールなどはこの同じ關係をそのまゝ西洋思想と東洋精神との對照にして居ります。

西洋文明——或はヘレニズムの文化は、中世末の所謂啓蒙運動、文藝復興（ルネサンス）から、ルソーあたりの「自然

に還れ」など云ふ大モットーのもとに、殆ど全世界の人心を席捲するの大狂瀾を擧げた。「自然に還れ」と云ふ趨向の、知識の上の現はれは十九世紀の自然科學である。政治上の現はれは、ビスマーク流の國家の暴力主義である。文學藝術の上の現はれは、ロマンチシズム以後、自然主義、印象主義、象徵主義、未來派、立體派、乃至昨今の表現主義、構成派など云ふ、すべて近代的と呼ばるゝ一切の偶像破壞（イコノクラスム）の大運動である。經濟生活に於ては人間の機械化——從つて伴ふ資本主義の發生などがそれである。この諸相のうちで、最もよくその趨向の特徵をハッキリ示して居るものは自然科學である。總て身外の事物の、横の關係を客觀するの傾向を强調すれば、人間生活一切の諸相は大體に於てそんな方向を取るのが當然であるが、就中、東洋の老莊思想と、印度の吠陀（ヴェーダ）と、希臘に於ける自然崇拜と、近世に於ける自然科學が、横の見方の、最も標本的、代表的なるものと謂ふべきであります。

ところでその横の文明が、特に世界大戰以來、著しく行詰つて、破綻百出、殆拾收すべからざる有樣になつたと云ふこと、これは時代を豫感し得る識者の等しく認むるところである。で、すべて物窮すれば通ず、全世界の人心が、この行詰りから如何なる血路を拓き、近き將來に於て現るべき文化史上のエポックが、ドンナ形ちで來るかと云ふことを考へて見ますのに、恐らくそれは、文藝復興（ルネサンス）の形ちで來るのではなくして、信仰復活（リヴァイバル）の形ちで來るものだらうと思はれます。ルソーの所謂「自然に還れ」と云ふことの代りに、「神に還れ」と云ふことになりませう。モット端的に申せば、横の代りに縱を取れと云ふことになりませう。歷史に例を取れば、希臘に於けるペリクリース時代のやうなものが來るんではなくして、寧ろ紀元二世紀頃の羅馬に見たやうな、一種の信仰樹立の運動であらうと思はれ

ます。そしてその大きな縱の運動に主役を演ずるものが、その傳統に於て、その大勢に於て、吾々東洋人であらねばならぬと言ふことは、天の啓示として進んで確信しなさやならぬことで御座います。横に對するの縱、ヘレニズムに對するのヘブライズム、西洋文明の基調に對する東洋文明の基調、現象に對する實在、無常に對する永遠、遠心に對するの求心、平面に對するの立體――かく大體の趨向を異にする諸相が双方から落ち合ひ、渦をまき、涌沸し、醗酵し、そして來るべき時代の準備をなしつゝある、その只眞ん中に、ひとり敢然身を挺して、後から續くものゝ爲に、水先き案内の役を承るべく運命づけられたのが、吾々、日本の圖書館事業ではありますまいか？

平面的に圖書館の機械主義の上に吾人が負ふた十字架は前段既にこれを詳述しました。更にその目的主義の上に、立體的に、或は人格的に負ふた、縱と横との十字架と申しますのは取りも直さずそれで御座います。來るべき時代――横をコントロールし、マスターして、縱に一線を劃する時代の基調が、宗教と云ふ名で來るのか、藝術と云ふ名で來るのか、それは何とも申しかねます。然し少くとも今までの意味内容に於ける宗教でも乃至藝術でもありますまい。たゞ云ひ得ることは、宗教とシミラアに、縱の行きかたを取つたものでなければならぬと云ふことだけです。その時代に於て、從來の宗教に於ける教會とシミラアなパートを演じなければならぬものは、實に吾々の圖書館事業で御座います。

將來に對するの豫言を、この講演の結論として、綜合的に述べることは、極めて困難なことに存じますが、殆アット、ランドムに、その時代に於ける圖書館の諸相を拾つて見ますれば、例へば從來の圖書館が、平面的であつたのに對して、將來の圖書館は立體的であらねばならぬ。今までの圖書館は圖書の

堆積、その器械的の整頓に終つたのに對して、今後の圖書館は一の人格であり、圖書はその細胞でなからねばならぬ。人肉の堆積を指して、人間と謂はざる如く、單なる圖書の堆積、乃至その平面的、機械的の處理は、圖書館たるの資格を失ふことになる。西洋の、所謂平面的圖書館學の泰斗たるリチャードソンが、何處かで『圖書館の仕事のうちで、そのアクメたるものは分類である。』と云つて居るが、吾々から見れば、妙な云ひ方だ。西洋從來の平面的組合せになつてる圖書館の仕事にアクメがあるのは、アメリカに帝王が居る樣なものだ。しかし吾人の云ふ圖書館の仕事にアクメは歴然として在る。それは分類でも何でもない、圖書館の「知慧」の完成である。延いては、館長以下從事員、閲覧者、その在る鄕土住民の、人間としての完成である。これを要するに圖書館が「書籍」てふ死せる偉大なる靈魂の墓場であり、圖書館從業者が後生大事に「牌子」てふ過去帳を守り、多數の石塔墓標にも比すべき圖書を、何等の感激なく精神的彈力なくたゞ機械的にイヂくつて能事了れりとした時代は今將に過ぎんとしつつある。死せる靈魂が生ける人心にとつて意味あるは、その取扱方如何によつて死せる靈魂遂に死せるにあらず、生ける命の不朽の結晶たり、不斷の源泉たり、常住の燈明たるを得るからである。歴史は過去のものである、單なる年代記は、人類の足跡たり、又は拔殼たる以上に意味あるものではない。然れども史家の取扱方如何によつて、それは生ける人生となり、輝ける世界となる。眞の歴史家の歴史に於ける、これを以て自家の世界觀（エルトアンシヤウング）の創造をなす。佛蘭西革命てふ事件又はその年代記に二物あるなし。然れどもランケが之を見る、テースが之を見る、乃至カーライルが之を見る、クロパトキンが之を見る、更に箕作元八が之を見る、煙山專太郎が之を見るに應じて、全然別個の世界の出來事たるの觀を

成す。これその事實を摯出表現する人の世界觀が異ればである。茲に於て乎、歴史哲學の勃興を見る。歴史哲學旣に在り焉、豈圖書哲學なかるべけんやです。從來の圖書學（ヒブリオグラフィー）は之を要するに過去帳的書名の無機的膿別に過ぎず。管理法、分類法、牌子製作法、編制法、曰く何、曰く何、如何に其巧緻と煩瑣とを誇るも、所詮活機なき一種のメカニズムたるに過ぎず。斯る時代の圖書館に長たる者は、世事に稻晦した、隱居然たる、多少の知つた風の書籍學者（ヒブリオグラファー）であり。多少の聞き噛りと、見やう見眞似の圖書館學者であれば、お茶を濁して居られた。が時代は急潮の如く廻つた。改造と覺醒の警鐘は、全世界に地響き打たして轟き渉りつつある。我東洋の圖書館も、埃臭い古庫の奥から、否應なしに街頭に引出される運命に遭つた。時代の外的要求と、圖書館自體の內的醱酵作用は、從來の書籍學（Bibliography）をして百尺竿頭一歩を進めて書籍哲學（Biblio-philosophy）たらしめねばやまぬ。從來の退嬰的書籍學者をして、勇躍一番、文化の綜合機關の大旗を擁立する、生きた書籍哲學者たらしめねばやまぬ。かゝる書籍哲學者たる圖書館長によつて築かれし圖書館の建築、藏書、牌子、器具、裝飾、目錄乃至館內の空氣は、これ一個の創作にして、各分子相寄りて、一體系の世界觀を、一曲の音樂を、或は一大伽藍の如き藝術を擎出す。曾つてフリードリヒ・シュレーゲルは、建築を以て凍れる音樂なりとした。此の筆法に擬して云へば、新時代の圖書館は、それ人類の凍れる靈魂の集大成か、館長從業員が彈じ出せる時代人心の凍れる交響樂（オーケストラ）か。もろもろの藝術は、音樂の境地に向つて上昇（アスパイア）するものであると誰かが云つた。現代社會文化のすべての現象を、各種の藝術に比すれば、その音樂の地位に在るものは圖書館である。沸沸せる文化運動のすべての現象をゴシック建築に譬ふる時、その身顫ひ乍ら天に昇らんとする建築各部の感激を

綜合し、これを象徴する、最高の尖塔に當るものはわが圖書館であります。

それは從來の宗教に似、從來の哲學に似、更に從來の藝術に似て、而してその三者の本質的なるもの、信仰と、思惟と、感激との三要素が渾然融和して昇華され、それを地上に具象化したる、人文史上に比倫を絶せる、人類最高、最大の創造であらねばならぬのです。

來るべき時代の圖書館をそこまで引上げ、その經營を斯く浮彫りにするには、第一その作者たる館長、從業員が、先づ人間として浮彫りにされねばならぬ。この問題は、畢竟するに、館員の、人間としての自覺と完成と云ふことに歸します。横の見方で、ダーヰン流の、猿の從兄としての人間を知ると同時に、舊約に於ける創世紀の所謂、神からインスパイアされたものとしての吾を感ぜなければならぬのであります。

かくて、飽まで精進の勇を皷して、平面的に、仕事のメカニズムの上に東西兩洋の文化をクロスさせると共に、その平面に横はる十字架を縱に起し、これを双手に頭上高く擎げて、今、右往左往、しどろにノタウチ廻りつゝある世界人心の闇を照らす炬火とすること——それを私は日本圖書館事業の、世界的意義及び使命と解して、玆に先輩諸友の嚴正なる御批判を仰ぎたいのであります。長々と御清聽を賜つたことを深く感謝致します。

分類の論理的原則

何によらず物事を考へたり、推論したりするに當つて、それを間違ひなくやるには、分類と云ふことをせずには出來ない相談である。大抵の人間は、知らず識らず、その生活のすべてを分類してかかつて居る。鳥渡した日常の會話で、「美しい家」とか、「隣家には綺麗な犬が居る」とか云ふが、そんなことを云ふ時、吾人の心には、その「家」なり、「犬」なりに對應する何かの考へがなければ、その言葉は意味を成さぬ。即ち、言葉が吾々の心中に於て、家なら家と云ふ、自分達が住んで居る一群の事物に對する考へ、犬なら犬と云ふ一定の性質を持つて居る一群の家畜に對する考へを創造する。吾々がその性質を認識すること、及びそれに伴ふて、家や犬を、それぞれの正當な群れ、即ちその

類（*Classes*）

に分けて收めるところの心的徑路が、取りも直さず分類すると云ふことである。何でもいゝ、過去にあつたもの、現在あるもの、將來ありさうなもの——人、樹、町、動物——と勝手に考へて見給へ。諸君はタイして考へて見なくとも、そんなものは、どの點でか他の似たやうなもの、或は一樣なものと關係して居ることが解るだらう。即ち、人間性を持つて居ること、植物の生活をしてること、動物の生活をしてることなど云ふ性質で、事物の類の一部分を成して居るのだ。若し宇宙間に、全然他の事物に似ても似つかぬものがあつたとすれば、それはユニークのものである。しかし、現在そんなものがあらうなど思ふ必要は先づない。現在、將來に亙り、吾人が知り、感じ、見る一切の事物は、それに似た他の或物

の一部分であるか、少くとも他の或物に關係して居る、即ちそれは、或る類の一員である、と、まアそんな假定を殆ど安心して受容れて置いてよろしい。

そこで、分類すると云ふことは、事物を類に配列することである。故に、吾人に取つて第一に必要なことは類と云ふものゝ意味を明確にすることであらねばならぬ。一つの類と云ふは、最も簡單に云へば、多少互に似たり寄つたりの事物が集つて居る一群のことである。ザット云へば一つの類とは一つの Genus（屬）と同じものだ。ところがこゝに吾々は、説明しなきや解らぬ論理學的の名辭にブッかつた。Genus（屬）とは何だ？これはもと〳〵アリストートルの書いたものに連關して現れた、

Five Predicables（五範疇）

と云ふ、スコラ學派の論理のうちにある一と續きの名辭のうちで、その第一に來る、最も大切な言葉である。分類と云ふことを根本的に、滑らかに了解する爲には、イヤでもこの一件から片づけてかからねばならぬ。で、五つの範疇とは、Genus（屬）、Species（種）、Differentia（特異）、Property（共通性質）、Accident（偶性）のことで、假りに使つた括弧の中の譯語は非常に生硬なものであるが、すべての場合に通用する、適切な譯語がないので何とも致し方ない。まアそんなものだと見當だけつけておいて、以下この五つの範疇は原語で押通して行かうと思ふ。

ファウラアはその『演繹論理』に於て定義して曰く——

Genus とは、幾つかのヨリ狹き群れを含む個々のものゝ、ヨリ廣き一つの群れを云ひ現はす共通の名辭である。

Speecies とは、Genusに對しては、その Genus に含まるゝところの、ヨリ狹き一と群れを云ひ現はし個々のものに對しては、その個々を含む一と群れを云ひ現はす共通の名辭である。

Differentia とは一の屬性にして、その屬性たるや、或る共通名辭の內包の一部を云ひ現はすと共に、その名辭を、同一 Genus の下にある他のすべての Species より區別するものでなければならぬ。

Property とは一の屬性にして、その屬性たるや、其の共通名辭の內容の如何なる部分をも云ひ現はすものにあらざるも、その名辭の內包の或る部分より出で、原因より結果へ、或は前提より結論へと追隨するものであらねばならぬ。

Accident とは一の屬性にして、その屬性たる、或る共通名辭に指示されたる個々のものゝ全部乃至一部に就いて確證せられ得、又は一個に就いて確證せられ得ることありとするも、その共通名辭の意味に含まれず、又そこに意味さるゝ何物からも推定せられぬものでなければならぬ。

事柄が大變面倒臭くなつたやうであるが、これは何でもないことで、簡單に申せば、こゝに似たり寄つたりの一群のものがある。それが二つ或はそれ以上のものに分けることも出來る。もとあつた一群が卽ち Genus で、分けられた二つ以上のものが Species だ。卽ち Species とは Genus を分けたものだ。然したゞ分けると云つても、盲ら滅法に二つなり三つなりに叩き割るんぢやない。分け方に一定の方寸がある。方寸と云ふのは、もとの一群たる Genus に附けられた或る性質だ。これを Differentia と申す。Property とは、その Genus の全體に行渡つては居るが、必ずしもその性質がなけりやその Genus

が成立たない程の、論理上の所謂定義の中に這入ることを要しない性質だ。Accident とは藪から棒にヒョツコリ現れた、所謂偶然の性質で、その性質が一つの類の全部に行渡つて居ることもあれば居ないこともあらう。それはドウでも御勝手たるべし。卽ち一つの類の各員に關係あることを必要としない。

解つたやうでまだよく解らぬと何處かで云つてるやうだな。シチ六かしい論理學の眼潰しをブツつけられたと云ふ形ちだが、手品の種を明せば、頭に入れるのは何でもない。Genus とは、幾つかの Species に分たれ得べき事物の一と群れだ。そこで動物なる名辭は、獅子だの、象だの、犬だの、その他種々の動物に對しては一の Genus である。逆に獅子や象は各々、動物と云ふ Genus の Spcies である。だが、Genus にはこんな變つた趣きがある。卽ち或事物のドノ群れを持つて來ても、その群れは、その群れを形作くるものに對してはこれ亦一の Genus である。で、犬は動物に對してこそ一の Species であるが、獵犬だの、セッタア種だの、スパニエルだの其他色々な犬の種類に對しては、今度は犬そのものが Genus になる。一口に獵犬と云つても色々ある。猪獵に使ふ犬、狐獵に使ふ犬、狼獵に使ふ犬もあらう。そんなものに對しては、今度は獵犬と云ふのが一の Genus に昇格する。凭ういふ風に何時までも繰返して行くと、結局吾々は、隣りの犬と云ふ、個の犬に到達するのである。

こんな風に、Genus を Species に分けるに當つて、吾々はたゞこれを叩き割るんぢやないと云つた。割つて行く方寸として、吾々は、同一 Genus のうちから甲と云ふ Species を拾ひ出すには、甲を他の乙、丙、丁等の Species から區分する或る性質を着目しなきやならぬ。その着目された性質が Differentia

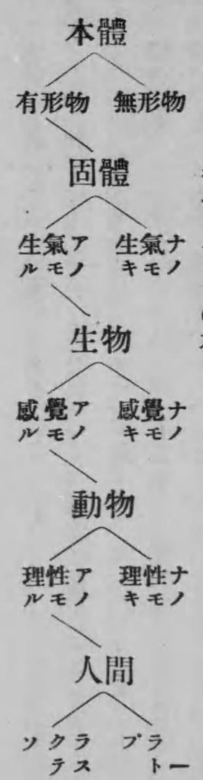
で、それあるが爲に新たに出來た Species には、似たもの同士が相集まると云ふことになる。一口に動物と云つても、獅子には、獅子の性質があつて、他の犬や猫とは違うところがある。その違つた點を着目することによつて、獅子を、犬や猫から引離すのである。吾々は家と云ふ Genus を持つて居る。今度はその家を造つた主要材料に着目して、石造の家、煉瓦の家、木造の家、テント張りの家など云ふ。卽ち石で造つたと云ふ性質、煉瓦で造つたと云ふ性質、木で造つたと云ふ性質、テントを張つたと云ふ性質、その性質あることによつて、種々の家が、家なる Genus の中から拾ひ出されて、そこに各別の Species を成すのだ。その遣り方を、似寄つて居ると云ふ點から見れば、一の動物は、他の如何なる生物によりも他の任意の動物の方にが餘計似て居る。一種の獅子は、苟しくも獅子と云ふ以上、他の如何なる動物によりも、他の獅子にが、ヨリ多く似て居る。煉瓦の家は、材料だけから云へば、石造、木造その他の材料を使つた家に比して、他の任意の煉瓦の家にが餘計似て居る。その結果、差別、卽 Differentia をつける毎に、似る程度が增すと云ふことになる。分類の最も初步な仕事は、似寄つたものを、似ぬものから區別することであるが、それをするには、今云つた Differentia と云ふことが最も重要な方寸になるのだ。その Differentia を摘み出し、眼に見えるやうにする心的作用を稱して Abstraction（抽出）と云ふ。

Property とは、一の Genus の全體に共通して存し、同時に必ずしもその Genus にのみ限つて在ることを要せぬところの、何等かの性質を云ふ言葉である。本なら本と云ふことを鳥渡考へて見る。すると吾々は、讀まるゝと云ふ Property を持つた物を思ふ。本は皆その性質を持つて居る。が、讀まれるも

のは本ばかりかと云ふと、必ずしも左樣とは限らぬ。心臟を持つて居ると云ふことは人間の Property である。が、必ずしもそれは人間に限つたことではない。諸君は、云ふまでもなく、本以外に讀まるゝものを擧げ、人間以外に心臟を持つものを擧ぐることが出來るであらう。Accident とは、一つの類に於けるその事物に存するも可、存せぬも可にして、而してその類中の他の性質に關係影響なき一つの性質である。例へば家と云ふ類に於て、家の色は一の Accident で、その Accident たる、家の性質までも左右する樣なことはせぬ。物の大さと云ふことも一の Accident である。小さな人でも、人間たるの Property に於ては大きな人と違ひはせぬ。人間たるに至つては同じだが、大小と云ふ Accident が違ふ。本の例を取つて云へば——さうだ、ミルトンの「失樂園」の、八折本（オクタボ）と十二折本（ヂユオデシモ）とありとする。詩の性質は同じものだが、單に版の大きさと云ふ人爲的の事柄が違う。その違う大さが卽ち Accident である。

プロチヌスの弟子で、新プラトー派の哲學者として知られてボルフイリーが、今の範疇を應用して有名な「ボルフイリーの木」なる、一種の圖式を案出した。これは吾人が有する、最も簡單な、そして最も古い一つの分類の見本である。

ボルフイリーの木



ある事物を認め、これを分類する爲に、この木にあるやうに、吾人の心がその辿るべきところを辿つて行く。その作用をする心意の法則を研究すれば非常に面白いことであるが、しかしそれは吾人の目的とするところと違うから餘り深入せぬことにするが、兎に角吾人はこのポルフイリーの工夫から多くのことを學び得る。この木だけは吾人の研究を一貫して常に役に立つものであるから、その積りで居て欲しい。第一、それは本體に關する、一の、非常に初歩的な分類である。即ち本體はこの分類表の主要な類であつて、その區分及び細分が、この主要なる類のすべての部分となつて居る。一歩一歩に、區分を出す爲に、本體の全部に含まれる性質が拾ひ上げられて居る。これを數學の記號で示せば、

本體＝非固體＋固體
固體＝本體＋有形物
生物＝本體＋有形物＋生命
動物＝本體＋有形物＋生命＋感覺
人間＝本體＋有形物＋生命＋感覺＋理性
プラトー＝本體＋有形物＋生命＋感覺＋理性＋名つげられし個人

この場合各行の最初の語は、それぞれ本體に對して考へれば一の Species であり、本體の一部分であり、本體に含まれて居るところの Property を持つて居るものである。が、又一つ一つの語は、その次に來る名辭に對すれば一の Genus である。先きにあるものは、その次のものに區分され得る。各行の最後のプラスの次に來るものが、その別な區分、即ち新らしい Species をつくる爲に持つて來られ

た Differentia である。論理學者は吾人に告げて云ふ、本體は大きな

外延（*Extension*）
があつて、そして小さな
内延（*Intension*）

を持つものだと。成る程ポルフイリーの木を上から下に辿つて見ると、下になる程、名辭は外延が減じて、内延が增して來る。上に辿れば内延が減るだけ、外延が增して行く、こんな風に、内延と外延は互ひに、反比例に增減する。先づ吾々はそこから十分理解して行かう。名辭の外延と申すは、單にその名辭によつて包容さるゝすべての事物を意味するものである。本體と云ふのは　非常に廣い名辭である。それは殆ど無限の事物を包容して居る。餘り包容して居るものが多いので、吾々は本體の性質に就いては殆ど知るところがない。固體も可なり廣い名辭である。しかし本體程廣くはない。從つて、固體は本體よりも小さな外延を持つて居る。同時に、固體と云へば、本體よりもハツキリと事物の或る一類であることを思はしむる。即ち、本體よりも大なる内延を持つと云ふことになる。この推理の方法を續けて行くと、名辭が段々下に降るに從つて、その名辭が包容するものが狹く、小さくなる。同時にその名辭の包容するものゝ姿がハツキリして來る。その名辭によつて包容さるゝ事物の數が小さくなるに從つて、その外延は小さくなる。が、さうなると吾々はその事物に就いて、餘計に知つて來る、即ちその内延が增して來るのである。名辭の外延と云ふことは、その名辭を適用して得る限りのすべての事物を包容するものであり、名辭の内延とはその事物の性質を云ふものである。無限の外延を持ち乍ら、内延は

零に近い本體と云ふものが先づある。その本體から、個體と云ふ、ヨリ大なる內延を持つものを引出すべく、その本體に加えられた性質が、「形あるもの」と云ふことである。動物と云ふ名辭から、人を引出すべく、その動物に加へられた性質が、「理性あるもの」と云ふことである。生物と云へば非常に範圍は廣いが、意味は漠然として居る。しかし動物と云へば、それより範圍は狹くなるが、意味は餘計ハッキリして來る。その動物の意味も、人間と云ふより漠然として居る。人間は動物より意味はハッキリしてゐるが、一方範圍は狹くなつて居る。だから、ズット大きく、本體は非常に廣き外延を持ち、非常に狹き內延を持つ一つの名辭であるが、逆にプラトーは非常に小さき外延を持ち、非常に大なる內延を持つ名辭と云ふことになる。

斯くの如くポルフイリーの木によつて圖解された原則は分類の精神たるもので、名辭の列べかたは、大なる外延にして小さき內延より起つて、小さな外延にして大なる內延へと向はねばならぬ。

玆に非常に大切なことは、その列べ方が、順序を逐ふて居なければならぬと云ふことである。一つ一つの廣い名辭がそれより狹い名辭に分たるゝことは解つた、が、しかし出來得る限り、一番近い廣さを持つ名辭に分たれなければならぬ。例へば、本體を分つて、

個體
動物
プラトー

とすることが出來ぬことはない。が、それは今云つた法則に照らして見ると、個體と動物との間に、又

動物とプラトーとの間に拔けてるものがある。即ち順序的でない、飛び越して居る。これは誤つた列べかたである。これを稱して吾々の言葉では名辭が適當に

Modulate（調整）

されて居ないと云ふ。分類がよく出來る爲には

區分の進行が順次の階段を踏み、各々の名辭が、その次位にある名辭に調整しなければならぬ。

この調整を支配する精神が分類の主要な法則である。事物は、その似た程度に應じて纏められ、似ない程度に應じ引離されねばならぬ。かくて、如何なる類に於てもその第一回の區分は、その類中の大多數の事物と最もよく似て居るものから成立つのである。次の、第二回の區分は、大多數の事物と似て居る程度が較々劣るが、それでも他の事物よりも遙かによく似て居なければならぬ。こんな風にして、類中の事物の全部を列べることを進めて行くと、連續した事物の群れが出來、そしてその群れは一々、決して飛び越すことをしないで次の群れに調整して行く。その爲には、群れを示す名辭が順次に外延が小さくなり、同時に內延が大きくなつて行かねばならぬ。

いま一つこのポルフイリーの木から學ばねばならぬ重大なことがある。それは、

分類の名辭は互に排拒的であらねばならぬ。

卽ち、名辭が下に降るにつけて出來て行く一一の名辭によつて指示さるゝ事物は、その名辭が包含するもの以外のあらゆるものを排拒しなければならぬ。生物は、生物以外のあらゆるもの、個體の外はもとより、その內にあるものを悉く排拒する。動物は、生物の內外を問はず、動物以外のものを取り入れ

ない。人間は、人間以外の動物をそのうちに入れない。プラトーは、プラトー以外のものを一切取入れない。

かゝる分類は區分するに當つて、一定の素因を用うることによつて成し遂げらるゝのである。

ボルフイリーの木を見るに、その列べ方は、何處までも生物學的である、一貫して念頭に置かれてあるものは生命と云ふこと、及びそれから出た區分である。が、この原則は、二三の簡單な他の例を用うれば直ぐ解る。吾々が或る題件を分類せんとするなら、先づ第一に分けようとする方針を搜さねばならぬ。假りに人間を分類しようとしてこんな表を作つたとせよ。

英國人
佛蘭西人
支那人
阿弗利加人
黑人
亞米利加人
エスキモ人

最初は國民性で分け初めたが、そこへ持つて來て、黑人だのエスキモ人だのと云ふ人種と云ふ素因を混入したから、分類はスツカリ混雜して仕舞つた。誰も知つてる通り、黑人は阿弗利加人にもあれば、事實亞米利加人にもある。だから、黑人はその二つに這入る。即ち名辭が互ひに排拒し合はない。相互

排拒の原則に合はないから分類になつて居ない。家を分類するとして、ドンナ方針ででも分類されるが、先づその材料からするとせば、

石造の家
煉瓦の家
木造の家
石板の家

までは、いゝが、そこへ持つて來て「住む家」なり、「赤い家」なりを投じて見玉へ。石造の家にも、煉瓦の家にも住む家はあるだらうし、赤い色の家もあらうから、そこで忽ち混戰狀態を呈する。分類者が當初その分類の計畫を樹つるに當つて定めてかゝつた方針以外の、他の方針を混入させることを

Crossdivision（又は *Cross-classification*）

と云ふ。分類の根據として選ばれた方針を、

分類の特質（*Characteristic of classification*）

と云ふ。ボルフイリーの木に於ける分類の特質は生物學的であつた、今云つた人間の分類では國民的であり、家ではその材料であつた。で、この理窟を法則として纏めて云へば、

分類の基礎たるべく選ばれた特質は一定不變であらねばならぬ

と云ふことになる。

彌陀が衆生に對して取つた態度は、罪あるものも、罪なきものも、賢愚、肖不肖を論せず、一切萬衆

攝取不捨、洩れなくこれを救はうとした。分類にも亦斯くの如き用意が必要である。卽ち分類の價値は、その分類表の周到性に負ふところ大なりである。分類は、出來得る限り、事物のすべての部門を、洩れなくその表中に配列すべきである、苟しくもその表中に列し得るあらゆる事物の名を舉ぐべきである。これは實際に於ては恐らく不可能なことかも知れぬ、何となれば、宇宙にありとある事物を一つの分類表中に入れろと云ふことであるから。が、要するにそれは精神であつて、事實に於ては、分類を、適當に、相當の撓性と云はうか、屈伸性と云ふはうか、一種の彈力を持つやうに拵えて、その困難を入爲的に救ふことが出來る。今まで分類表に無かつた新しい名辭が現れたら、表の全體の順序連絡を狂はせぬやうに、それを如何なる部門にでも挿入し得るやうにするのだ。これが卽ち、分類表の撓性である。

吾々は可なり長いことかかつて特質及び一定不變の特質を用うることの大切な所以を說いたが、勢ひ然らば分類表をつくるにはドンな特質を選んで、區分の方寸とすればいいか？と云ふ問題が起る。答へは極めて簡單である。その分類表を使ふ目的に最も役に立つものを選べと云ふ一句に盡きる。同じ圖書館の本でも、百人の違つた人が使ふに應じ、それぞれ百樣の特質があり得る筈だ。製本屋から見れば、その最も利害關係乃至興味を感ずる點——卽ち製本屋の特質は製本だから、希くば、その本を製本してある材料に隨つて排列して欲しいと云ふだらう。旅行者なら、他の特質はドウでもいゝから、地理的に排列して呉れと要求するだらう。お寺の坊さんなら、宗派を特質にしたいだらう。そんな風の人だけが使ふ圖書館なら、今云つたそれぞれの分け方が、それぞれの場合に一番役に立つ。卽その目的に對

して最も有效な特質と云ふことになる。だが、若し吾々がその圖書館の本に對し一般分類と云ふことを考へるなら——その瞬間、專ら本を一と纏めに見渡して——吾には容易に如上の諸特質が孰れも一般讀者に取つて最善のものでないと云ふことを看取するであらう。長年月の間、分類表の作者共は、「最善の特質」について議論を鬪はして居た。そしてドドのつまり意見の平均がとれて、落ちついたところは、歷史的か、或は進化的の特質がよからうと云ふことになつた。これによると、本の列び方が、殆どその取扱つて居る題件それ自身の發達に近似して來るからである。これは多少込み入つたことで、ドレがいゝと云ふことについて滿場一致の可決がない限り、吾々としてはハッキリかうとは云へぬ、云ひ得ることは、たゞ前に述べた、分類の目的に對して最も有効の特質を選べ、强いて意見をとなれば、ドウも歷史的の特質が一般に好都合のやうだと云ふことを繰返すより他はない。

今まで名辭々々と云つて、諸君は十分その言葉の意味を知つて居られるものとして話して來たが、こゝでその意味をハッキリきめておくのもよからう。名辭とは、あらゆる事物の名——又は名の代用をする句である。「太郎」とは或る一人を示す名辭である。「戸の傍に立つてる人」と云ふのも、名の代用をする一の名辭である。名辭に二つの種類がある、具體的のものと、抽象的のものだ。具體名辭は　事又は物を指し、抽象名辭は性質を指す。「子供」、「石」、「木」は具體名辭であり、「子供らしさ」、「堅いこと」、「木のやうな」と云ふことは抽象名辭である。これは論理の本を見れば必ず書いてあることで、この上追窮する必要もないが、吾人が當面の問題たる分類に關して、名辭のことで默つて居られない大切なことが一つある。卽ち、

分類するに當つて、名辭は必ず一定不變の意味に使はれねばならぬと云ふことだ。同じ言葉でも、使ふ場によつて色々に意味が變る。推理をするに當つて途中で意味が變つては混雜の基だ。滿洲に居ると、日本人と支那人とを比べて、「日本人は鋭い」と云ふ。無論比喩の意味だが、何も鋭いと云つて、「ナイフが鋭い」と同じワケで、その身體に、觸るれば切れる刄を持つて居るのではない。その邊の見界ひもなく、

鋭いもの
滿洲に居る日本人
剃刀
針
フォクステリア獵犬

などとヤッツケやうものなら大笑ひだ。ドンナ名辭でも用うるには一向差閊えないが、氣をつけなければならぬことは、その名辭たるや、その分類表中を終始一貫して、唯一つ意味だけを持つて居なければならぬと云ふことである。

以上一と通り分類の論理的の基礎を瞥見したワケであるが、圖書分類と云ふ、非常に複雜な、千變萬化、殆端睨すべからざる處理も、歸するところ、上述數項の延長又は適用たるに過ぎぬ。その原則を、少しでも過まれば、分類は際限もなく混雜して來る。原則の許す範圍内であれば分類は整然として居る筈だ。たゞ實用に際して、この原則が何處まで實際と妥協するか、それが殘された問題である。

——（奉天圖書館業務研究會にて）——

圖書分類に於ける題件（subject）と形式（form）

知識が單に抽象的に吾人の頭の中に在る間は、自から、知らず識らずのうちに、殆ど純論理的に分類整頓されてある、或は、分類整頓されてあり得る。しかしそれが圖書なら圖書と云ふ形ちに盛られると、今度は概念ではなくして、具體的の本なる物品を處理しなきやならぬので、イヤでもそこに理論以外の方便が加はつて來る。前段に說いた論理的原則の一點張りで押通せなくなる。形のない概念である間は、必要に應じてそれを分割することも、乃至他のものに融合させて置くことも隨意であつたが、本となれば、それが、物理的に、取扱ひの單位となる。分類するのに不都合だからと云つて本を割ることも出來ねば、他のものと同じだからと云つて、二つも三つも綴ぢ合して一體にすることも出來ぬ。一冊の本の、分類による置き場所は一ヶ所である。物理的に一ヶ所の空間を占める（卽ち、他の同樣なものと、同一個所に、同時に共置されることが出來ぬ）と同時に、その本に如何なる他の側面があつても、アチコチ持つて廻るワケに行かぬ。分類で一度本の地位に決定が與えられたら、その本は、永久にその一個所に留まらなければならぬ。そこで純なる概念上の分類と、本なる物理的物品との間に方便的な妥協が行はれる。所謂「自然分類」に對して、多少の「人爲分類」が加味されて來る。それが段々コンガラがつて來ると、何處までが自然で、何處からが人爲か、見界ひがつかなくなつて、そこに分類混亂の第一歩が始まる。ゼボンスが「圖書分類の不合理」を云つたのはツマリこの自然分類と、方便的な圖書の物理的配列との行き違ひを云つたものである。

吾々の日常生活に於てよく、事柄は結構だが、事情が許さぬとか、理屈はかうだが、實際は云々など云ふ。此場合、事柄や理屈は概念であつて、事情や實際は、その概念を具體化し、これを事實の上に飜譯する「時」或は「場合」の色んな條件である。吾人が會社の仕事をやるに際しても、よく事項は認むるが會社の事情がこれを許さぬので、など云ふ挨拶をきく。主として計理方面からそんなことをきく。會社の仕事を、頭の中で考へてるばかりでは、如何に結構なことでも、繪に描いた御馳走見たようなものだ。これを事實の上に飜譯するには金が要る。そこで當事者と計理關係との間に、酢だのコンニャクだのと押し問答して、然るべきところで鳧がつく。一種の妥協だ。眞如の月は皎々として空に在る。掬水月在手と云ふが、千萬人が、水を手に掬ひ上げて、中天の月影を、掌中に握れば、月の姿は千々に碎くる。水を捨つれば月影も手には殘らぬ。結婚前に、眞善美の結晶見たいな久遠の女性を胸に描いても、實際の場合は、それと似ても似つかぬ、をかしな女と一生連れ添はなければならなかつたりする。圖書分類に於ても、純理論でサブゼクトを取扱ひの對象にしようとしてもサブゼクトなる天空の月影を宿す掌中の水は、圖書と云ふ形ちになつて居る。掌なり水なりがなければ、月影も手には留らぬ。本と云ふ姿(卽ち一種の形式)、サブゼクトがそこに掬ひ上げられた實際の情況(卽ち取扱ひの態度から來た形式)、その他の色々な實情のうちに影を落さなければ、折角のサブゼクトも、物理的な取扱ひの對象にはならぬ。こゝに「薔薇」と云ふ一のサブゼクトがある。單に概念としての薔薇は何處までもたゞ薔薇で、ケロリと濟まして居られるけども、實際に取扱はれ場合を考へると、それは、

生物學的、植物學的、園藝的、歷史的、地理的、倫理的、裝飾的、法律的、寓意的、象徵的、書目

學的、詩的、音樂的、社會學的……

と、際限もない程、種々の立場から見られ得る。更にそれは、「衣裳服裝」の飾りにも關し、「香氣」にも聯關し、「醫療」にも聯關し得ると同時に、本の形としては、薔薇に關する書目もあれば、薔薇專門の辭書もあり、薔薇百科辭書もあり、薔薇專門の雜誌もあり、薔薇研究學會の出版物もあり、薔薇の目錄(カタログ)もある。ブラウンは斯くの如く一のサブゼクトに對して生じ得る形式、立場、見方、關係等を、驚く勿れ約四百ばかりを數えて、別に範疇表なるもので、その一々に記號を與えて居る。更に、認識は概念と直觀との合致だとすれば、その合致には必ずや時空間の問題を伴ふ。前に、概念を事實の上に飜譯する「時」と「場合」と云つたのはそれだ。例へば同じ薔薇の問題にしても、十九世紀のバラとか、紀元前のバラとか、昨日のバラとか、或は印度のバラとか、支那のバラとか、日本のバラ、乃公のうちの前庭のバラとか云ふことがある。「唐代に於ける支那の薔薇に關する書目」など云ふ、バラと云ふ一のサブゼクトを書目と云ふ本の形式と、唐代なる時代と、支那と云ふ土地と、三方面から取扱つた本が、何時出て來ぬと誰が保證し得るものぞだ。そこでサブゼクトに對する種々の範疇がブラウンに隨つて四百ありとすれば

400×(あらゆる土地、場所の數)×(あらゆる時代、時間表示の數)

と云ふ、途方もない數字の、見方、考へ方、取扱ひ方が有り得るワケだ。一のサブゼクトが、圖書取扱ひの對象となる千萬の事情あるうちで、就中その分類に於て、純理論と正面衝突をするのは、本たるの約束による、編纂上、出版上などの形式、及び著者がそのサブゼクトを取扱つた態度から來た內容の形式だ。辭書だとか、雜誌だとか云ふのが前者の適例で、一の事柄(ことがら)、卽ちサブゼクトの理論だとか、そ

の歴史だと云ふのが後者の例だ。普通に前の如きものを外形式と云ひ、後者に屬するものを內形式と云ふ。そこで、サブゼクトと、そんな種類の形式との區別をハッキリ腹に入れて置かぬと分類は始終混雜する。

例を圖書の場合に取つてもいゝが、本よりモット儼然とその物理的存在を强調して、その形式を極端にハッキリさせ得るやうなもの、日本にも西洋にもあるが、就中、支那に最も多い、石に字を刻んだものについて考へて見よう。北陵なら北陵の石碑、或は鐵道附屬地と商埠地とを界する石標、乃至赤壁に於ける東坡の賦を刻したものや、姑蘇城外寒山寺の碑でもよろしい。で、實際それを分類するとすれば、差しあたり色んなことが考へらるゝ、

一、刻字の國語（滿、漢、蒙、藏、或は拉丁、梵文、露文、日本文、英、佛、獨等、等、等）
二、刻字の意味（誰人の陵とか、是より南商埠地だとか、月落烏啼とか、壬戌の秋云々とか……）
三、書型（三代文字とか、禮、楷、眞、行、篆とか……）
四、石の所在地（滿洲奉天城外にあるとか、蘇州に在るとか……）
五、石其物の性質（大理石、花崗石云々）
六、石の由緒、歴史
七、石を建てた目的（地域を表示する爲、或は人なり、事蹟なりを紀念する爲、名詩、名文を傳うる爲）
八、石の意匠（龍を形どつたり、龜の形ちにしたりする）

この唯一つの「字を刻したる石」が持つ色々な側面を、出鱈目に鳥渡考へてもそれ位ゐはある。それでその石の前に來た人が、書家であり、詩人であり、考古學者であり、石材業者であり、美術家であり、歴史家であり、土地測量者であるに應じて、石がその人に對してアッピールする側面が違つて來るが、圖書館の圖書分類者としては、その石が建てられた目的が、最もアッピーリングな、そしてエッセンシャルなものだ。それが圖書館業者、少くとも分類當事者としてのサブゼクトである。他の形式、品質、國語、書體等の如きは、一のアクシデントに過ぎない。これを圖書扱ひにして、買取つて、參考品として圖書館の庭にでも運ぶと云ふことになれば、その問題では、價格や重量（從つて運搬費）が大にアッピールして來るが、それは分類としての問題ではなくして、寧ろ圖書館の庶務や會計に訴うる性質のものだ。圖書分類者としては、第一に「字を刻した石」の目的を考慮すればいゝのである。地標を示す石が非常に重いものであるとか、花崗石だとか、四角なものであるとか、非常に立派な書體など云ふことは、同じ地標を地圖の上で示す、點とか、赤符とかと同じものになつて仕舞ふ。この場合圖書館にとつての自然分類として訴うるものは、その地標と云ふサブゼクト（題件）であつて、他の色んな條件は、むしろ Accident だ。たとへその石がダイヤモンドであつても、或は圖書館の建物より大きなものであつても、分類當事者としては、そんな Accident で眼潰しを喰つてはイケない。ビクともしないで冷然と、そのサブゼクトを見ればよろしい。しかし、實際上の處理となれば、マサカ圖書館の建物より大きな石を運んで、書架の、當該部門に、他の本と並べて入れるワケには行かぬ。馬鹿げて大きな石と云ふその形式は一の偶然性（アクシデント）だが、實際上の處理に於ては、その偶然性が、ナカ々々馬鹿にならないので

ある。

月の晦日に、或は年の大晦日に、乃至は時に思立つて、自分の持つて居る一切の財産を數えて見ることがある。或は苦力や洋車夫がよく道端に立つて金勘定をやつて居る。この場合、その數えかたには必ず分類が行はれて居る。十錢は十錢、一圓は一圓と云つた風に、それが硬貨たると、紙幣たると、新貨たると、皺くちやの舊紙幣たるとの如きそのアクシデントを顧慮することなしに、同じ價値のものは同じところに重ねる。この場合分類の特質となつて居るものは、その貨幣の市場に於ける通用價値だけだ。そこで持ち合せのありだけを分類した結果は、

0　劵　類（株劵、爲替劵の如き）
1　一　錢　類
2　五　錢　類
3　十　錢　類
4　二　十　錢　類
5　五　十　錢　類
6　一　圓　類
7　五　圓　類
8　持　物（時計、指輪、寶玉、家財の如き）
9　十　圓　類

と云ふ風になつて、全懷中が數え上げらるゝ。圖表の、上の數字は、その各クラスに假りにつけた記號だ。そこで問題となるのは0門の劵類と、八門の持物だ。劵類のうちでも、カツキリ五圓の爲替劵なら、七門の五圓のところに一枚數え込めばいゝが、端數がついたり何かすると、他のいづれのクラスにも入れられぬ。仕方がないから劵類と云ふ、直接の市場通用價値ならぬアクシデントで纏める。八門も同樣の筋合で、持物は別に持物だけで纏める。これは吾々が日常生活で必ずやる、最も便宜な方法だ。かく分類することが、イクラの金高になるかと云ふことを目的とする場合に於て、吾々の全懷中を知る最もいゝ方法である。0門と八門が形式で、他の八個のクラスは悉くこの場合の分類の特質たる通用價値で分けて居る。今この金勘定を見た頭を移して、直ちにデユエーの十進法の主區分を見れば、

0	一般著作	（書目、辭書、雜誌等）	分類の特質 形式
1	哲學	（形而上學、論理、心理等）	題件
2	宗教	（自然神學、聖書、教會等）	題件
3	社會學	（統計、政治、法律等）	題件
4	言語學	（比較、各國別）	題件
5	自然科學	（數學、物理、化學等）	題件
6	技術	（醫、機械、農、商工等）	題件
7	美術	（建築、彫刻、繪畫等）	題件

8　文　　學（國語別）　　形式
9　歴　　史（地理、旅行、各國史）　　題件

卽ち圖書なる Genus の、十個の Species のうちで、二つだけは、その分類の特質として形式を取り、他の八つは共に揃ふて題件をとり、そしてその方針で、これから二階に、三階に、無際限に分類されて行かうと云ふのだ。これが十門揃うて、題件か形式か孰れかの一方で統一さるれば世話はないが、二筋に分れてるところに論理的の綻び目がある。西洋の分類の本など見ると、よくそこで、苦もなく兩方から妥協して居る事實を見る。現に玆でも今迄妥協々々と云つて來た。しかし妥協する前、モ少し必死に戰つて見る必要はなかつたか？純理分類と不純分類との分岐點にしないで、一筋途に血路を切り開かうとするの努力をして見たか？これを譬へて見れば、圖書分類の分野は目下の支那の政情だ、四百餘州に威力を揮ふてこれを統一し得るものがないから、始終ゴタつく。奉直戰などヤリ出すと、傍觀者共は今度こそ水を入れないで飽まで徹底的にやらせろと云ふ。圖書分類に於てもオイソレと妥協しないで、モ少し徹底的に必死の詮索をして見る必要がある。天下を取つて中央の座を占めるには、先づ0門以下の十州を取らねばならぬ。二州は形式が占有してる。あと八州は題件だ。ドチラか一方で片づけて行けないものか、さうすれば天下は一に歸し、南も北もなくなつて來る。こゝんとこがドウにかならないものかと長歎するのは、コリヤ人情だ。そこで、題件だ、形式だと云つて左樣まで頑迷にコダワらなきやならぬものかと思ふ。ひとつ天下十州の一州々々について、虱潰しにこれを調べて見て、アワよくば一方に片づけることを試みて見よう。

ところで從來論理の用語を借用して、始終 Characteristic と ばかり云つて來たが、これをモ少しラクに當節の慣用語に飜譯して見ると、すべて物の特質は、その生命となる本質的のもの、第一義的のものだ。それを殺して仕舞ふと、その所有主自身が死んで仕舞ふやうなものだ。生物學的に云へば、人間の手や足や一本位ゐ切斷しても、それだけでは死なぬ。が、心臟や頭髓を奪はれると直ぐ死ぬ。そこで常識的に、手足は第一義的、本質的のものぢやないが、心臟なり腦髓なりは、人體の第一義的、本質的のものだ。謂うところの特質だ。しかし見方次第で、人間は色んな本質的のもの、第一義的のものを持つて居る。生物學的には心臟でも頭腦でもいゝが、人格的には精神氣魄、主義主張、そんなものを第一義的に持つてる人もある。肉體は死しても精神を生かす人もある。金が第一義の人は、外のあらゆるものを犧牲にしても金に執着をする。金がその人に取つては、生命或は生命以上のものだ、卽ち特質だ。基督に取つてはその信仰が第一義的のものである。肉體的には、十字架にかけられて死んでも、その信仰は數千百年に亘つて生きて居る。ソクラテースに取つて第一義的のものは、その理知だ。理知の爲には從容として獄屋に毒杯を仰いだ。基督には、その信仰が死ぬ時、眞の死が來る。ソクラテースは、その理知が死ぬ時、眞に死するのだ。この世に信仰も理知もなくなれば、基督もソクラテースもなくなるのだ。卽ち物の第一義的のものを吟味するには、その被試驗物を、その所有主から奪ふなり、殺すなりして見るがいい。それがなくとも、どうやらやつて行ける位ゐでは、所謂 Accident である。本質とか、特質とか云ふ域に達せぬ。無くなればその所有主も併せて無くなる位ゐに、根深く奥に喰込んで居なければ所謂本物ではない。

そこで、その吟味法を、圖書の十大部門に一々適用して見ると、先づ、總記卽ち一般著作に於ては、雜誌なら雜誌の第一義的のものは何かと搜して見る。內容として知識（卽ち題件）を澤山盛つて居るから、その題件が、第一義的、本質的のもののやうにも思はれる。これは尤もなことだ。專門的の參考圖書館や、研究室や何かでは、雜誌を雜誌の形で置かないで、そのうちの必要な知識、卽ち題件に解體してしまふ。必要なところだけ取つて他の九門の孰れかに整理して、要らない廣告だの、口繪だの、表紙だのは反故籠に投じたり、ペチカの焚附にして仕舞ふ。これは一番世話がない。しかしそれでモー雜誌と云ふものは無くなるのである。ところが普通の圖書館ではソンなことはしない。雜誌は依然雜誌として取扱ふ。百科辭書は百科辭書とする。必要なところだけ引裂いて、他の九門の孰れかに分割して仕舞ふやうなことをせぬ。何處までも雜誌なら雜誌のまゝ、百科辭書なら百科辭書のまゝソツとし置く。左樣なると、雜誌で第一義的のもの、尠くとも圖書館的に見て第一義的のものは、雜誌と云ふ其形式だ。中央公論なら、中央公論を、題件的に見て、そのうちに今月は哲學なり、宗教なりの題件がなかつても、人間から手一本取つた位ゐで、依然として中央公論は成立つ。文藝欄がなかつたら、深手は深手だが、雜誌としての生命はまだある。しかし中央公論から、雜誌と云ふ形式を奪つて見玉へ。モー何にも殘らぬ。中に盛られた知識、題件は、各部門々々に四散してしまつてあとかたもなくなる。圖書館當事者が、雜誌を雜誌としての存在を認容して居る限り、雜誌の第一義的のもの、本質的のもの、ツマリその必至の特質は、雜誌と云ふ形式である。臺所に四斗樽がある。その中に酒が入つて居れば、その樽を指して「酒」と云ふ。白菜が漬けてあれば、その樽を指して「白菜」といふ。しかし同じ空樽を利用し

て、その中に酒の瓶も、醬油の瓶も、味噌の包みも、乃至市場から提げて來た澤庵も白菜の漬物も、便宜上入れて置くとする。その內容の一々を分けて戶棚なり押入れなりにしまへば別だが、手近いところに樽の中に雜居させて置くとすれば、そんなものの充滿したものを指して、その容器の名で「樽」と云ふ。この際、本質は、その纏りに於ては樽だ。雜誌は恰かもその雜居の四斗樽に當る。そして樽は容器で一種の形式である。

これを人間の生活に譬ふれば、知識は當節流行のプロレタリアで、非常にデモクラな生活振りを示して居る。向ふ三軒兩隣り、八公熊公アグラ掻いて、裸一貫で相伍して居るが、雜誌の中の知識は、自ら繞らすに墻壁を以てし、お邸の奧の生活をして居る。一種のブルジョアを氣取つてる。八公熊公は御互ひに呼ぶ時、「オイ八」、「熊ドウダイ」と云ひ交はすが、お邸生活や、宮殿の奧深いところに籠居してる人は、直接その名を呼ばれないで、「お邸樣」とか「殿樣」とか云つて、その本人を收容してる家なり、場所なりを指して呼ぶ。內地のブロの嬶アのお何も滿洲に來れば「奧さん」になる。八も熊も、武器やモヒや利權で儲けて一躍成金になり、堂々たる邸宅の奧深くでも納まらうものならモー八や熊でなくて「○○家」だ。デモクラで行けば直接本人を指して、オイとかコラとか云へばいゝのに、特權階級では、人を指して、その居る閣で猶俺きたらずに、その下と云ふ意味でゝもあるのか、「閣下」と云ふ。宣統帝が北京に居て、皇居に蟠居してる限りは皇帝の形式を持つて居る。そんな形式が何かの邪魔になるなら、宮殿と云ふその容器から逐ひ出すよりほかに仕方がない。形式なしの裸一貫で出て終へば、宣統帝も八公も熊公も同じことだ。そこで本論の、雜誌の題件を雜誌なる容器、卽ち形式から放逐しないで置く限

り、ブルがお邸に居るやうなもの、宣統帝が北京の皇居に居るやうなものだ。それを忍容してる以上、雑誌の「お邸」扱ひは免れない。雑誌を「お邸」にすることが、雑誌としての本質、即ちその必至の特質を捉えたことになる。これは雑誌ばかりではない。百科辭書も、拔萃も、0門と云ふ花道の七三に長裃で左様然らばと、威儀を正して居流れる並び大名は皆同じた。於是乎、0門は頑迷不靈で、難攻不落、いくら攻めて見ても到底駄目だ。

次に哲學、宗教、純美術の如きは、從來說いたところでは、その本質的のものは題件となつて居るが、鳥渡考へて見ると今度は逆に、文學と同じく何故形式ぢやないかと云ふ疑問も起る。申すまでもなく哲學其物は一の形式だ。宗教其物は形式の大親玉だ。更に純藝術、即ち音樂、繪畫、彫刻、演劇其物は形式の標本見たようなものだ。サア、形式と題件のイサカヒで、形式が大變景氣よくなつて來た。前段の0門は無論形式、八門の文學は形式と云ふことに協定濟み。そこで、十門揃ふてヒタ押しに形式が占領することになれば、今にも天下統一の業が出來さうだ。占めた！などとハシヤギ出して、飛び上るとドッコイ足許が危い。成る程、美術は形式に違ひないが、圖書館が美術館にあらざる限り、美術の作品其物を主眼としては居ない。圖書館で芝居をやるワケでもなければ、祭壇を設けて宗教上の儀式を執り行ふでもない。鐵道と云ふ部門はあつてても、ナニも館内で汽車を運轉させて見せるのぢやない。圖書館に取扱ふものは、哲學の知識、即ち題件であり、宗教に關するの知識、即ち題件である。譬へば、藝術から、その藝術たるの形式、畫なら線や色、音樂なら音を除いたら、その本質を殺したんだから、畫は畫として成立しない。音樂は音樂として成立しない。然し、圖書館の本には、音もなければ、繪畫

要素としての色も線もない。あるものは本ばかりだ。本の中に、その本の生命となり、第一義的、本質的のものとなつて居るのは、『音樂に關するの知識』、『宗教に關するの知識』、『繪畫に關するの知識』、即ち題件だけだ。音樂そのものはその形式たる音響なしには成立たないが、本としては、音響は要らない。閲覧室で無暗にピイ〳〵キイ〳〵音など立てようものなら、喧しくって仕様がない。必要なものは音樂に關する知識である、題件である。その題件がなけりや、音樂に關するの本は、本として成立たない。音樂に關する本の心臓は、正に音なる形式にあらずして、音樂の知識である、題件である。哲學、宗教、社會學、言語學、自然科學、純藝術、歴史皆この筆法で、その第一義的なるもの、そのエッセンスたるものはそれぞれの項目の内容である、知識である、題件である。これで脆くも八州風を望んで題件の軍門に降つた。殘る一つは文學と云ふ馮玉祥將軍だ。案外形式に片づきさうな八州が、一瞬の糠喜びから逆轉して、一潟千里に題件側にトッ走つたので、出來ることなら、文學もその道伴れにしたい。一體全體文學は題件ぢやイケないものか？と先づ開き直る。ところで、文學が花なる題件を歌つたとして、それを無理に、昔しの幼學便覧流に『花の部』に入れるとする。然しそれでは文學の本質的なものを捉えたと云ふことにならぬ。月を歌つてるから『月の部』に入れるとしても、その作者がその作品に托した生命は、それでは片づけられぬ。科學者が、知識を以て、花に對する時、花の構造や、その生殖作用、種の保存方法を取扱ふのに一致するが、詩人の花に對する、時と場合で泣くこともあれば、嬉しがることもある。天文學者が月に對する態度の本質は一致してるが、歌人の月に對する、恨んだり、樂しんだりして、時と場合の氣紛れで一向アテにならぬ。そして月に對する詩、花に對するの歌の本質た

り、生命たるものは、悲しかつたり、樂しかつたりする詩人の感情其物である。文學では作者の氣紛れが本質だ。文學以外の他の各門は皆本に盛られた知識を本質として、本はその媒介物（メディユーム）たるの役目をして居るのであるが、文學に至つては、作者の感情を盛つた形式そのものが、チャンと書架に並んで居る。音樂の部門に音はなかつたけれども、文學の部門には文學其物がある。文學たる形式そのものを文學部類から除くと、文學部類は成立しない。イヤでも文學の本質は形式ならざるを得ないのである。

同じやうに本と云ふ形に盛られてあるので、やゝもすると吾々は無理にもこれを同じ樣に取扱はうとするが、よく考へて見れば、文學と他の九門はその素質が異ふ、成立が違ふ。他の九門は、圖書としては人間の知の所產である。宗教も音樂も、それが本の中に盛らるれば、それは知識である。然るに文學は、特に文學部類の九分九厘を占むる作品は、情の產物である。これを香水に譬ふれば、知識は香水の水である。文學の生命は香水の香である。知識を處置する時は、その水を捉えて處置すればいゝのであるが、香は、その本來個有の容器から引放しては捉えようがない。沙翁のハムレットの獨白に、有名なる To be or not to be, that is question……の長文句がある。これを飜譯して、ツマリその容器を移して、『あるべきか、あらざるべきか、これ疑問……』と云つて見ても一向ピーンと來ない。然るに英語そのまゝなら、若い王子が生死の間を彷徨する心境が讀者の心を強く擊つ。文學の身上はそれだ。文學の香を移すツモリで、國語と云ふ容器に、その水を移すやうなことをして、如何に早稻田の坪內老博士が、能がかりの言葉附きで、『生きようか、死なうか、これが疑問ぢや。』などヤッて見ても、人間の魂の底に撤するの聲とはならぬ。文學物を、一の國語から他の國語へ飜譯するは、香水の香を移す目的で、

その水を、甲の瓶から乙の瓶へ詰め替えるやうなものだ。移してるうちに香は發散して仕舞ふ。殘つて居ても、移り香位ゐのホノかな匂ひだ。それだから、文學にはその香の容器たる言葉そのものが必至的のものである。形式を除いて文學は成立せぬ。先刻から散々月の例を引いたが、『秋の夜は長いものとはまんまるな、月見る人の心かも……更けて待てども來ぬ人を音づるものは鐘ばかり、數ふる指も寢つ、起きつ、わしや照らされて、居るワイなあ。』この『秋の夜』の端唄はたしかに文學だ。圖書館の文學の日本の俗謠の中には、この作品が生地のまゝ、媒介物にて知識化せられずに、現物としてある。このうちから、（野暮な沙汰だが）特質を吟味するとして、題件の『月』を奪つても、戀する女の感情は死なぬ。しかし言葉なる形式が無くなる時、歌それ自身もなくなる。かりにこの言葉と云ふ形式を、英語なり、佛蘭西語なりに飜譯するとする。意味だけは香水の水を移すやうに移されぬこともなからう。しかし、『長い』と『まんまる』の言葉の對照がその通りに行けるか疑問だ。『寢つ、起きつ』は、いづれは月の射す閨に、根の弛んだ潰し島田の鬢のホツレを搔き上げて、博多の伊達卷きか何かで體をくの字なりにひねらせ乍ら、月の光を惱ましく半面に受けて、時々溜息しつゝ、『わしや』と自稱する女自身が寢て見つ、起きて見つ、更にその待ち詫びて鐘を數ふる女の白い指が寢つ、起きつしてるのだらう。『寢つ、起きつ』と云ふ動詞には、指と、女自身との二個の主格がある。これを外國語にドウ飜譯するか？主格は二つでも『寢つ、起きつ』の言葉は一つであるから、ドウやらそこも巧みに切拔けたとしても、今度は更に厄介なものがある。『音づる』と云ひ、『照らされて』と云ふ、言葉卽ち形式は一つであつても、各二つの題件（！）、少くとも意味內容を持つて居る。『音づる』は鐘の音と、戀人の訪れと、二つの意味に

かかり、『照らされて』には、月に照らされてと、戀人が來なくつて、スッポかされ氣味でテレて居る、その二つの意味がある。これを一つの言葉で如何にして外國語で傳へようとするのか。到底出來ぬ相談だ。文明が段々進むにつれて、人間が墮落し、性の道德が低下するのを見て、誰かが洒落交りに 'Civilization is syphilisation,' と喝破した。意味、卽ち知識としては『文明は梅毒化なり』だが、さう云つて終つては言葉の面白味はスッカリ失はるゝ。この短いシャレの文學としての本質生命は死んだと云つていゝ。殘るものは、香を移すに水を移したやう、その歌なり、警句なりの意味と云ふ水ばかりだ。これに反して知識の場合は、水さえ移せばいゝ。香などドウでもよろしい。『三角形の內角の和は二直角なり』と云ふ命題は、日本語で書かうが、支那語で書かうが、乃至英、獨、露、佛、何で書いてもその第一義的のもの、卽ち知識たるの本質は、形式の如何によつて少しも損せられぬ。文學と他の知識部類の間には、それだけ根本的の差違がある。文學の本質は形式、他の諸門の第一義的のものは題件、天下は遂に一に歸せず。黃河の水の澄む日は來るとも、圖書の分野に於ける南北統一はまづ出來ない相談と、玆に明白にゼボンスの所謂『圖書分類の論理的不都合』を承認せざるを得ない。

圖書なる Genus を分類するに當つて吾々は、本の性質上、圖書館の約束上、遂にその一定不變の必至的特質を掴み得ず、その或物は、題件によつて分け、その或物は形式によつて分けた。論理上、根本的に許すべからざる原則を破つた。論理は思想の數學である。決してウソを云はない、胡麻化されない。因果は廻る何とやらで播いた種子は自ら刈らねばならぬ。この重大なる Crossdivision の結果は分類の結果に掩ふところなき迄現はれて居る。前述の例で見る、月なら月、花なら花が、知識として或場所に顏

を出してるかと思ふと、今度は表現の形式として詩や歌のうちに出て來る。更に圖書の形式として雜誌や辭書に出て來る。分けられた Species に於ける、『相互排拒』が行はれて居ない。

本來文學の性質は、あらゆるものを形式化し得るのである。前に引いた『三角形の內角の和は二直角なり』と云ふ命題でも、云ひ廻しかた一つでは隨分文學になる。科學でも、宗教でも、哲學でも、すべての知識、すべての題件は、これを文學化することが出來る。戀を盛んに歌つた、例へば獨逸のロマンチシズムの詩人ハイチの如きは自然科學の生物の『欲動（トリーブ）』を文學化したものだ。哲學者や、宗教家には、何處までが文學者で、何處からが哲學家、宗教家であるか判別に苦しむやうなのがザラにある。ニーチエは哲學者か、文學者か？ 哲學の思想（知識、卽ち題件）を表現するのに文學の形式を以てして居る。莊子なども正にその顯著な一例だ。カントの『純性理性批判』なら哲學に片づけるのに躊躇しないが、ニーチエの『ツアラツストラ』や、莊子の『逍遙游』の特質はドチラかと云ふことになると鳥渡マゴつかざるを得なくなる。

嚴密な意味から云へば一種の Cross-division たることに甘んじて、圖書分類の、形式と題件の部類に於ては、同じものが二重に出ると云ふことを承知して居なければならぬ。圖書分類は論理的に一絲紊れずと申したいが、本そのものゝ約束で、形式と題件との綾織りとなつた。謂うところの『論理的不都合』と、その結果とを承知して、その綾を綾とし、或は縱に、或は橫に、或は斜に來る、複雜な內外二樣の形式と題件の梭の手を間違えぬやう、その限られたる意味に於て一絲紊れず、圖書分類の、眼もアヤな、變化のうちに統一のある、知識と感情との綾羅を織出すのが吾人の任務である。

——（第二次奉直戰の兵火漸く收まらんとする時、奉天圖書館業務研究會にて）——

圖書記號組合せの話

——森羅萬象を洩れなく掬ひ上げようとする記號の網の目——

圖書や記錄や書類を分類整頓してこれに記號をつける方法として目下世界を通じて最も汎く行はれて居るのは、亞米利加のデユエーが創設した十進法です。これは算用數字だけを使つて、その十進的組合せによつて、宇宙の森羅萬象、苟しくも圖書文献の形に表現される一切のものを、その記號の網の目で掬ひ上げて、あとは記號順にさえ圖書が列べらるれば、機械的に自ら宇宙知識の秩序連絡に於て、その圖書が自分で自分の坐席を占めるやうになると云ふ素晴らしい仕掛けです。この十進法は創設が最も早くして、既にモウ五十年の經驗を積み、長所も短所も併せて斯業者に認められて居ます。その後、圖書分類の理論が段々纒められて一定の形ちに落ちつき、殆公式化されまして、その公式に基いて、更に完全な方法としてヤハリ亞米利加のカッターが、今度は主としてエービーシーの組合せで、所謂『開展式』なる體系を發表し、更に最も近く、英國のブラウンが、エービーシーと數字との組合せになる、『題件法』なるものを發表しました。今日のところでは先づこの三種の體系が、吾々の圖書館科學に於て、最も進んだ、そして完備した分類法、記號法と云ふことになつて居ます。然るに茲に遺憾なことは、圖書館の實際の仕事は、この種の體系に比して遙に遲れ、且劣つて居るのです。世界の最大圖書館である大英博

物館の分類の如き、當事者のエドワード、ガーネット君に云はせると、これで結構、十分間に合ふと負け惜しみを云つて居ますが、理論としては非常に缺點のあるものです。米國の議院圖書館も、同樣にその批難は免れません。若しそれ日本に至つては、上野の圖書館や、燒けた帝大の圖書館のそれなど、殆ど原始的と申していゝでせう。そこが六ケしいもので、最初兎も角も間に合せに分類の眞似事見たやうなことをやつて居るうちに、ドン〳〵圖書は增加する、一方に分類法は色々に進んで、便利な體系が發表される。實際と理論とが、日に月に懸け放れて、十年も經てばそこに比較にならぬ距離を生じて來るのです。そんな有樣で、目下世界の、主として大きな圖書館は大抵この分類法のデイレムマに引懸つて居ると申していゝでせう。生れて間もない若い圖書館なら始末もいゝが、藏書何十萬、何百萬となつて、成長し切つた圖書館は、それを根本的に組織變へするなど到底出來ない相談です。差しあたり燒けた帝大の圖書館など、この際やり直すべきでせう。果してドンナ分類體系によるか、新たに體系を拵えるか、興味ある問題としてわたくし共は注目して居ります。

茲で何も分類體系や記號法の全般に亙つて兎やかく云ふツモリはありませんが、讀者のお慰み半分に上記のデユエーの十進法（これはＤＣとして通り名になつて居ます）のうち、最も面白い『共通區分』の應用の一班に就いてお咄し致します。そこで、先づＤＣでは、第一階の主區分が、

主區分（A）	一般著作（形式部門）	
0		學
1	哲	教
2	宗	會
3	社	語
4	言	學
5	科	術
6	技	術
7	美	學（形式部門）
8	文	史
9	歷	

この第一階の主區分はそのまゝそつとして置いて、今度は0門一般著作（所謂形式部門）を見ると、

(B) 一般形式細分	
01	理論
02	拔萃書
03	辭典
04	エッセイ物
05	定期會
06	學習
07	學集
08	雜史
09	雜歷

この細分が何處に行つても共通して、茲に擧げたやうな意味を荷つて居ます。これをAの主區分と任意に組合はせると、例へば主區分によつて七は美術ですから、七〇一は美術の哲學、卽ち美學などの記號になり、七〇五は美術雜誌、七〇九は美術の歷史、同樣に文學雜誌は八〇五、哲學雜誌は一〇五、宗教雜誌は二〇五、科學々會の報告なら五〇六、言語學に關するのエッセイなら四〇四、哲學辭書なら一〇三と云ふ風に記號されます。記號さえ正確であれば、あとは子供にでも、その記號通りに書架に配列させれば、そこにあるだけのものがそれ〴〵、その順序で自分の坐席を占めることになるワケです。更に文學の方面では、

(C) 形式文學細分	
1	詩
2	劇
3	小說
4	エッセイ說
5	演說
6	書翰
7	ユーモア
8	雜の學
9	地方主要文

次に諸國語の共通細分を、一部分抄出すれば、

(D) 國語細分	
2	英語
3	獨逸語
…9	
3	チユートン系諸小國語
…3	
3	和蘭語
…7	
3	瑞典語
3	丁抹、諾威語
4	佛蘭西語
5	伊太利語
6	西班牙語
…9	
6	葡萄牙語
7	丁語
8	臘語
9	希諸小國語
…2	
…7	
1	サンスクリット
1	露西亞語
…5	
9	日本語

原表には全世界の國語を配置してありますが、……で途中を飛ばし〳〵して先づ右だけ拾つて、これを、第一に擧げたAの主區分によつて、言語の四、文學の八と任意に組合はせて見ます。（尻尾の字形の變つた數字が前掲の表から持つて來て組合せたものです。）

列	記	甲
42	英	語學
82	英	文學
83	獨逸	文學
43	獨逸	語學
45	伊太利	語學
85	伊太利	文學
8917	露	文學
4917	露	語學
895	日本	文學

即ち八を第一階に持つてるものが文學で、四は言語、そしてその次階から國語別に自分の該當する記號を取つて、自分の居場所に著くワケです。　この各樣の組合せのうち、文學、即ち八を戴くものゝ尻尾に上掲のCの文學形式細分が結び附くと、

				詩劇說說
				の の 小 小
				學學學學
				文文文文
82	1	英	文	學
83	4	獨	文	學
85	3	伊	文	學
8917	3	露	文	學
895	4	日本文學のエッセイ		
895	1	日	拉	希
87	1		丁	臘
88	2			

これで先づザット、英國のブローニングやスキンバーンの詩なら八二一、ハウプトマンの『沈鐘』なら八三二、ダヌンチオやバビニの小說なら八五三、トルストイやツルゲーネフやドストエフスキーの小說なら八九一七三、厨川白村のエッセイなら八九五四、北原白秋の詩なら八九五一、ヴアージルの『エニアッド』なら八七一、ユーリピダスやソフオクレスの悲劇なら八八二と記號されることになりました。今度は本の方から行けば、イブセンの『人形の家』は、諾威文學の劇で、Aによつて文學八、Dの國語細分によつて諾威語は三九八、劇はCの文學形式細分により二だから、八三九八二、ストリンドベリーの『痴人の懺悔』なら、八は前通り、瑞典語は國語細分によつて諾威の直ぐお隣りの三九七、これはその小

說だから三、即ち八三九七三と記號をうけるのです。瞰石の『猫』なら、日本文學のユーモアで、日本文學は八九五、ユーモアはCの文學形式細分で七だから、八九五七と云ふことになりませう。

今度は言語學の方にも左の共通細分があります。

				分細通共語言(E)
				字原書語法韻言書語方
				異 科地
				義 殊
				綴語辭同文音訛敎特
				1 2 3 4 5 6 7 8 9

これを前に擧げた列記甲のうちから、頭に四（即ち言語）を戴くものゝ尻尾に任意にクッ附けると、

								字書法科書原字語韻字
								綴辭文語語語語綴亞音語
								西
								逸逸逸逸露の本
								獨獨獨獨獨獨日
列記乙								
42	1	英	〃	〃	獨	6	1	4917
42	3	〃	〃	〃	獨	獨	獨	495
42	5	〃	〃	〃	獨	獨	獨	
43	8	獨	獨	獨	逸	逸	逸	
43	2	1						
43	1							

と云ふ風になります。『諾威語の辭書』でも、『サンスクリットの文法』でも、讀者が勝手に御自分で組

合せを試みて見られるとよろしい。玆で注意すべきことは、四二一を無理に『英語の詩』と讀めないこともないのですが、詩は英文學で八二一となつて居ますので、四を冠した、卽ち言語の場合はEによつて素直に、『一』は綴字と云ふことに納得するのです。その逆を申せば、八二一は『英文學の綴字』ではなくして、八を冠して居ると云ふことで『英文學の詩』、卽この場合の『一』はCに從つて詩とするのです。

今度は試みに前掲の列記乙の記號の結尾の數字、卽ち言語學の共通細分から持つて來た數字だけを一掃して、始めの方に擧げた、Bの一般形式細分の記號を、手當り次第、任意に入れ代へて見ると、

42 01	英語の理論	
42 02	言語學としての英語の拔萃	
42 06	英語學會報告	
43 07	獨逸語練習の書	
43 05	獨逸語學雜誌	
43 01	獨逸語の理論	語誌
4917 05	露西亞雜學	歷史
495 09	日本語の	

四二が英語で、0が一般で、一がその理論、以下皆その筆法で、上記の如き本の記號になるのです。今度は、この頭にある四を一掃して、その代りに文學の八を入れますと、

8 201	英文學の理論	
8 202	英文學拔萃	
8 206	英文學會報告	
8 307	獨文學教習圖書	
8 305	獨文學雜誌	
8 301	獨文學の理論	學誌
8 91705	露西亞文學雜	史
8 9509	日本文學	

Bなる一般形式細分の記號を持つて來る時は、必ずOを伴ふことを忘れてはなりませぬ。この場合、Oは『一般』と云ふことゝ、『形式』と云ふ意味を持つて居ます。例へば八二〇一を一つ〳〵に讀めば、八は文學、二は英語、Oはその一般を、一卽ち理論と云ふ形式で取扱つたものと云ふことになります。その以下、すべてその通りの意味を伴ふて居ると思つていゝのです。間違えてOを脱すれば八二一は英文學の詩、八二二は英文學の劇となり、四二一は英語の綴字となり、四二二は英語の語原となること前述の通りです。八九五〇九なら日本文學史、八九五九となると、Cの細分により日本文學の主要な傍系的地方文學と云ふことになりますから、琉球文學でも充てたらいゝかと思ひます。

以上の簡單な抄出の組合せによつて、大抵の文學者、語學者の藏書の荒い整理が出來はせぬかと思ひます。試みにやつて御覽にならむことをお勸めします。希臘や拉丁や歐洲方面の主要文學はまづそれでいゝとしても、記號の數字がチョイ〳〵飛んで居る。例へば、

8917 露西亞文學

892 セミチツク文學

893 ハミチツク文學

894 シーシアン、ウラル アルタイ、チユラニアン文學

895 日本文學

即ち、露西亞文學から日本文學に移るまでに、その第一階、第二階までは同じだが、第三階に於て二、三、四と飛び越してる。これをドウするかと云ふことになりますが、そのギャップには原體系では上に書き加へたやうなものが這入ることになつて居ます。記號が飛んで居れば、それに該當するものが御藏書のうちにないと云ふことを一見して看取する、消極的な便利も、分類法に伴ふ特典の一つです。そしてあとから本が來たらその當該記號でその中間に挿入することが出來るのです。しかし八九二のセミチツク文學中にも、アラビア文學や、ヘブリユ文學のものは隨分普通の書齋に有りさうですから、序でにその記號を擧げますと、

8 92 セミチツク文學

8 924 ヘブリユ文學

8 927 アラビア文學

となつて居ます。これらの第一階の八を四に入れ代へれば、それぞれの文學であつたのが、今度はそれぞれの語學になること申すまでも御座いません。

今度は少し眼先きを變へましてやはりDCのうちから地理的細分を、今の流義で差あたり使ひさうなものを少し拾ひ上げて見ますと、

(F) 地理的細分

4 歐羅巴
41 蘇格蘭・愛土
42 英蘭・エールス
43 獨逸
44 佛蘭西
45 伊太利
46 西班牙・葡萄牙
47 露西亞
48 諾威・瑞典
49…492 歐洲諸國
5 和蘭
51 亞細亞
511…515 支那
517 北蒙古
518 西藏
519 滿洲
52…57 日本 シベリア

これがAの主區分の九なる歴史と結べば、

9 4 歐羅巴の歴史
9 5 亞細亞の歴史
9 51 支那の歴史
9 52 日本の歴史
9 57 シベリアの歴史

となり、第二階までの記號で歐羅巴史と亞細亞史と相隣り、第三階で英、獨、佛、伊等の順で、各國の歷史がズラリと竝び、九五一の支那史と、九五二の日本史とは第三階の一。、二。で相隣りして立ち、そのあとから蒙古史(9517)、滿洲史(9518)、朝鮮史(9519)が來れば、第四階の數字で、支那と日本の中間に割り込んで位置を占めるのです。そこでこの記號の讀み方ですが、これを支那史なら九百五十一と讀んではお仕舞ひです。その次にはドンナ本が來ても、九百五十二でも配當しなきやならぬ結果になりますから、飽まで十進的に、その意味も讀み方も、頭から、九の五の一と云ふことにして、その各階に割り込む餘地を存して置くのです。これが十進法の非常に便利な點であります。

これだけでは、單にその土地の普通に云ふ歷史でしたが、これが各種の事項に結附きますと、その事項の歷史になります。例へば、農業は主區分によつて六三〇（六技術、三農業、0はその一般）、その下に上記歷史の記號をクツ附けると、

630 94 歐羅巴に於ける農業歷史
630.95 亞細亞 〃
630.951 支那 〃
630.952 日本 〃
630.957 シベリア 〃
630.9517 蒙古 〃
630.9518 滿洲 〃
630.9519 朝鮮 〃

醫學は六一〇（六技術、一醫術、0その一般）、そこで、前と同じ理屈で、

610.94 歐羅巴の醫術史
610.95 亞細亞 〃
610.943 獨逸 〃
610.951 支那 〃
610 9492 和蘭 〃
610.952 日本 〃

富士川游氏の書齋でも記號したら、自然こんなところが多くなるだらうと推察されます。

歷史と限らず、他の事項の地理區分も勿論有り得ると思ひます。例へば社會學は主區分(A)によつて三、その歷史は一般形式細分(B)によつて0九、その一が社會概觀になつて居ますから

309.1 社會概觀

これを地理的細分(F)しますと、

309.1 4 歐羅巴
309.1 5 亞細亞 〃
309.1 51 支那 〃
309.1 519 朝鮮 〃
309.1 52 日本 〃
309.1 57 シベリア 〃

人口は主區分によつて三一二（三社會、一統計、二人口）ですから、前同樣の組合せで、

312.4	歐羅巴の人口	
312.52	日本の人口	
312.492	和蘭の人口	
312.517	蒙古の人口	
312.518	滿洲の人口	

今度は更に方面をかへまして、玆に或る事項がある、するとそのサブゼクトに對する本が一ところに寄るワケであるが、そのまゝでは、これを是とし非とする、對蹠的のものが無差別に寄るだけである。それでは面白くない。例へば社會主義は主區分によつて三三五（三社會、三經濟、五社會主義）、これを取扱つた堺枯川氏の本も上杉愼吉氏の言說も無茶苦茶に一ところに群れるんぢや、吳越同舟でドチラからも抗議が出さうだから、それに贊成のものは十、非とするものは－を記號數字の下につけて、

335　義また主のじの會そ論も社をゝる

335 ＋　張の主も　〃する

335 －　との非も　〃する

と組み分ける。

婦人參政論は三二四・三、婦人解放は三九六・一、保護貿易は三三七・三、その下にプラス、マイナスをつけて、是非の論をわける。

324.3	－	婦人參政權說 非
337.3	＋	保護貿易說 是
396.1	－	婦人解放說 非

更に歷史や文學には、その場その場で時代の區分があります。これは今迄云つた、他の場所にも融通のきく所謂『共通區分』ではありませんけれども、實際的に分類をする時には、可なり重大なる要素になるのです。歐羅巴史は前に述べた通り九四だから、九四〇でその一般を取扱つたもの、そしてその次位は時代的區分になつて、世界大戰はその三と配當されて居ます。そこで世界大戰を記號すれば、

940.3　世界大戰

これに上記の地理的細分（F）を組合せると、

940.3 4	世界大戰に於ける	巴羅歐
940.3 45	〃	伊太利
940.3 44	〃	佛蘭西
940.3 43	〃	獨●墺
940.3 5	〃	亞細亞
940.3 52	〃	日本

地理的に云へば英蘭は四二、更にその下に細分があつて、倫敦は一、エールスは九です。そのエールスにも亦細分があつて、例へばペムブロークは九です。

42 1	倫敦
42 9	エールス
42 99	ペムブローク

この上に歴史の九が附けば、倫敦史、エールス史、ペムブローク史であること申すまでもありません。その下に英國史の時代區分を持つて來て見る。例へばチユードル王朝は〇五、エリザベスはその五で、つまりエリザベス朝は〇五五となる。

942.05	チユードル王朝時代の英國史
942.1 05	〃 倫敦の歴史
942.9 05	〃 エールスの歴史
942.99 05	〃ペムブロークの歴史
942.055	エリザベス王朝期の英國史
942.1 055	〃 倫敦史
942.9 055	〃 エールス史
942.99 055	〃ペムブローク史

よく乃公の圖書館では何位まで分類して居るなど云ふ『斯道の大家』がありますが、實務としては兎にかく、理論としては洵に可笑しな云ひ方で、本によつては、イクラ分類しようとしても、二三階より先きには行かないものもある。又幾十階にでも延ばさねばならぬものもある。幾位まで延びると云ふことは、理論上本の性質が決定するもので、圖書館當事者の手加減できまるべきではありません。概して、その名辭の、論理的に云ふ外延の大なる（從つて內延の小なる）サブゼクトを取扱つた本は、極めて僅かの階數で分類される。例へば、漠然と、文學とか科學とか、乃至宗教など云ふサブゼクトを取扱つた本は、その記號階數をイクラ延ばさうたつて、延びようがないが、サブゼクトが小さくなるに從つて、記號の階數は段々延びる。即ち、名辭の外延が縮少し、反對に內延が增すに比例して、分類は細か

になる。更にそのサブゼクトを、時代で絞り、場所で制限すると、猶更分類は細かに延びて行くワケだ。比較的小さなサブゼクトが、それ自身で細かな記號を取り、更に時代と場所とで三方から絞られた一例を擧げて見ませう。

『處女王朝期のペムブロークに於けるユニテリア會堂の祈禱書目』

016.264128842999055

016が書目、2641が祈禱、288がユニテリア派、4299がペムブローク、055がエリザベス、即ち處女王朝です。試みにこの記號を一つ々々に讀めば、0(總記)、1(書目)、6(特殊書目)、2(宗教)、6(教會)、4(儀式)、1(祈禱)、2(宗教)、8(基督教會)、8(ユニテリア派)、4(歐羅巴)、2(英蘭)、9(エールス)、9(ペムブローク)、0(時代一般)、5(チューードル王朝)、5(エリザベス時代)。

前に吾々は沙翁劇を『英文學の劇』と荒つぽく押えて八二二と記號しましたが、更にその劇にも時代區分がありまして、この場合はエリサベス朝が三になつて居ます。更に沙翁ものはそのエリサベス朝の三と配當されてありますので、沙翁のギリ〳〵の記號は、

822.33 (8文學, 2英, 2劇, 3エリサベス朝, 3沙翁)

更に其の下はアルファベットや數字を以て、Aはビブリオグラフイ、Bは傳記、と云ふ風に竝び、0よりZまで箇々の作品は配列し、箇々の作品に伴ふて其批評も竝ぶことになつて居ます。一例を擧げますと、『ハムレット』のテキストはS7、『ハムレット』に對する批評はS8だから、

82233S7 『ハムレット』

82233S8 その批評

と相隣りして書架に竝ぶのです。

イブセン劇は諸威文學の劇で、83982まで前に記號しましたが、更に細分すればその近代が六で、イブセンその人はその六。そこで、

839.8266 イブセン劇

839.8266 A イブセン關係書目

839.8266 B 〃 傳記

839.8266 D 〃 劇に對する批評

839.8266 I 〃 全集(テキスト)

839.8266 K 〃 全集飜譯

839.8266 L 〃 部分集(テキスト)

839.8266 N 〃 部分集飜譯

そしてOからZまでの字と數字とで、箇々の作品と、その批評が組合はされること、前の沙翁の例の如くであります。

例を擧げて居ると際限がありませんので、DCはこゝらで端折ることにしまして、其後、ブラッセルの國際圖書學會（Institut International de Bibliographie, Brussels）で、DCを基礎として、モットこれを應用の利くやうに改造した其一端をお話しすることにしませう。之れはIIBとして通つて居る記號法で、數字以外に色んな符牒を使ふことになつて居ます。例へばイブセン劇は前述の通り 8398266 ですがその日本語譯は、前の國語細分により日本語は 95 ですから、

839.8266=95　イブセン劇の日本語譯

數學のイクォールの印しが今のIIBでは『言語』の符牒なんです。

839.8266= 2	イブセン劇の英譯
839.8266= 3	〃　獨譯
839.8266= 4	〃　佛譯
839.8266= 917	〃　露譯
822.33= 95	沙翁劇邦譯
822.33S_7 = 95	『ハムレット』邦譯
822.33S_8 = 95	『ハムレット』の邦文批評

國語細分(D)と地理細分(F)は數字が似通つて居ますが、元來別物ですから、こんな場合誤つて、地理細分の方から數字を持つて來ぬやうにせぬと不可ません。地理細分を應用すべきものは、例へば農業は前掲の通り六三ですから、そこに持つて來て、

63(4)	農業	
63(42)	於ける巴國	〃
63(44)	英國西	〃
63(5)	佛蘭西亞	〃
63(518)	細亞洲	〃
63(57)	滿洲	〃
385(4)	シベリア	〃
385(5)	朝鮮	〃
385(518)	日本	〃
385(52)	歐羅巴	〃
385(4)	歐羅巴	〃
385(5)	細亞亞	〃
385(518)	滿洲	〃
385(57)	シベリア	〃
385(519)	朝鮮	〃
385(52)	日本	〃

IIBでは括弧が土地、場所を示すの符牒となつて居ます。鐵道は三八五ですから、

社會主義は前掲により三三五、そのサブゼクトを例へば佛蘭西の小説の形式に於て取扱つたものであれば、IIBではその關係を下のやうに示します。

335(O:843)

三三五が社會主義、八四三が佛文學の小説であることはDC其儘で、(O:　)がIIBで追加した、上記のやうな意味を荷う符牒なんです。婦人參政權問題（三二四、三）を取扱つた英語のドラマなら、

324.3(O:822)

婦人解放（三九六、一）をイブセンがドラマの形式で取扱つたとすれば、

396.1(O:8398266)

同樣な問題をストリンドベリーが小説の形式で取扱つたとすれば、ストリンドベリーは瑞典文學の小説で、83973だから、

396.1(O:83973)

イブセンはこれを是とし、ストリンドベリーはこれを非とするなら、

前者　396.1+(O:8398266)

後者　396.1−(O:83973)

これはDCとIIBとのホンの一班に觸れたばかりですが、この分類記號を應用して、圖書館は勿論、學校、研究所、官廳、大會社、新聞社などの參考圖書、記錄書類を整頓して置くことは、整理そのものに興味があり、牽索、引照に於て非常な能率を發揮することゝなります。餘り多數でない個人の藏書

なども、この方法で分類配列して置くと、一目して、自分の藏書が、圖書文獻の全體の擴がりに於て、ドノ部分に多くして、ドノ部分に缺如して居るか、その振合ひを看取する事が出來ます。文學者なら八を第一階に冠したものが多く、語學者なら四、理學者や醫師や技術者なら五（科學）や六（技術）のものが込み合つて、一（哲學）や、二（宗教）のものがガラ空きになるだらうし、宗教家や哲學者の書齋はその反對になるだらうし、森林太郎氏見たいな人の書齋を整理したら、恐らくドノ部門の數字もないものはないでせう。誰でもやつて見てしくじることですが、DCならDCを、表面的に唯十進の作用だけ見て、自分に都合のいゝやうに改造したがるものです。しかしなまじひに改造はせぬ方がよろしい。したら、上記のやうな、數字組合せの内的構成が狂つて仕舞ふ。よく一知半解の圖書館などで、區分の論理的、認識的の意義も辨せず、上述のやうな數字組合せの意味も解せず、有り合せのクラスを出鱈目に、十進的に配置して、これが分類だなどゝ云つて居ますが、噴飯に堪えぬ次第です。日本などに、國語で九五、地理で五二と云ふ風に下位の數字をアテガウのが怪しからん。苟しくも世界何大國とかの一に、などゝ見當違ひの憤慨をする人は、日本のものに限つてその數字を書かないで、それぞれの部類の第一位の上に置いて、九五、五二の順番のところには、ブロック一枚入れて、『第一位の前に置く』と指示すればいゝ。言語（四）と文學（八）とを並置したい方も同樣にすればよろしい。DCには誤りも無論ある。例へば、前にも擧げたやうに、朝鮮も關東州も支那の一部となり、一九二二年の十一版ですらまだ訂正して有りません。剩え臺灣すら依然として支那の一部になつて居ります。しかし政治的には兎にかく、主として過去に重點を置く文獻的には、そんな誤謬も大した邪魔にならぬのです。ブラウンの『題件分類』

は十年前に二版を出して居ますが、これによると、日本の地理歴史は大變に委しくなつて居ます。P300が日本で、P301—P320まで、神武即位（西暦紀元前六六〇）より大正に至るまでを二十區分して一々記號をあてがい、日本の大正時代はP32）となつて居ます。P330からP387までに、地名を配當してあります。東京はブラウンではP331です。わたくし共の居ますところは勿論先づ支那の記號をとりまして、滿洲はP482奉天はP484吉林はP483旅順はP486大連はP487です。ブラウンの體系では、見方、形式、關係等を決定する範疇番號と時と場所との記號を一定して居り、カッターにも地方別番號と云ふものがあります。色々にやり方は違ひますが或る記號が或意味を荷つて居ると云ふことは同じことで、これを吾々の職業では記號の mnemonic character と申しまして、非常に調法な、且面白いものとして居ります。上に引いた原體系の書名は左の通りです。

Deway: Decimal Classification. (Grafton)

Institut International de Bibliographie: Classification bibliographie décimale. Fascimile. I.

Cutter: Expansive classification. (Library Bureau)

Brown: Subject classification. (Grafton)

——（雜誌『書香』創刊號の爲に）——

278
91

終